

レゾナンス

音楽がAIと出会うとき



PAB SAN - パブ・サン

小説

レゾナンス

音楽が人工知能と出会うとき

Pab San - パブ・サン

© パブ・サン

pabsan@pabsan.org

書籍サイト: <https://resonance.pabsan.org/ja/>

音楽をともにしてきた友人たちへ

宙づりの音

「音楽はしばしば孤独のなかに生まれ、そのあと長いあいだ、自分に応えるものを探し続ける」

スタジオ

「場所によっては、沈黙さえ耳を澄ませている」

彼らは、とうの昔に聖別を解かれ、何十年も見捨てられていた古い宗教建築を買い取っていた。亀裂には風が抜ける。そんな廃墟だった。だが彼らにとっては、大聖堂だった。ステンドグラスも、囁く祈りもない。祭壇のかわりにアンプが置かれ、石の壁面を旋律の線がよじ登っていく、グルーヴの大聖堂だった。

パリ近郊にあるその場所は、彼らに必要なものをちょうどよく与えてくれた。近隣を気にせず何時でも演奏できるだけの距離があり、それでいて完全に遠すぎるわけでもない。時間をかけ、たつぷりと手を動かして、彼らはそこを自分たちらしい姿へと蘇らせた。どこ1つ完璧ではない。だからこそ、自分たちの場所だった。

キーボードのポールは、本館の裏手の土地を、無政府主義的な菜園へと変えていた。「野菜ってのは音楽と同じで、自由にさせてやらなきゃだめなんだよ」と、彼はよく言っていた。

ドラマーのニコは、敷地の別の一角を自分のものにして、そこで車の残骸を解体したり、いじくり回したり、そして元に戻し損ねたりするのをこよなく愛していた。「そのうち現代彫刻にしてやるよ。見てろって」と冗談めかして言うのだが、誰ひとり納得したことはなかった。

ベーシストのネイサンはというと、離れを占拠し、それを自分の「アルゴリズムの神殿」に仕立て上げていた。湿った壁に囲まれたその場所には、本物のデータセンターさながらの設備が据えられ、サーバーが昼夜を問わず低く唸っていた。そこで彼は、自分の人工知能プロジェクトに取り組んでいた。名前はハーモニー。仲間たちはその中身をほとんど理解していなかったが、だからといって集団的な持論を持たないわけではなかった。「ネイサンがちゃんと戻ってきて一緒に弾いてくれるなら、あいつの人工知能は何をやったって構わない。音楽を作ろうが、だ」

そしてギタリストのダヴィッドがいた。彼の空間だけは、周囲の混沌という掟から外れていた。かつての聖具室の一角を彼は修復し、時計職人の工房を思わせるほど整然とした作業場になっていた。ケーブルも、ペダルも、ピックも、すべてにひとつだけ居場所がある。まるで精密機器でも扱っているみたいだった。「お前、ほんとはスイスの時計の中で生まれたんじゃないのか、ダヴィッド？」とニコはしょっちゅうからかい、そのたびに彼は例の謎めいた笑みを返した。

それぞれに変人じみたところはあるにしても、ほんとうに大事なのはひとつだけだった。音楽である。かつての痕跡を壁に残したままの大きな主室に、彼らは集まって演奏した。そこは彼らの聖域だった。きしむ梁、揺れる影、石に跳ね返るわずかな残響、そのすべてが彼らの味方をしていた。

何時間も即興し続けることは、彼らにとってほとんど宗教行為だった。どのセッションも、二度と同じ姿では戻ってこないものを捕まえようとしていた。今夜の気分、ちょうどいい事故、エゴがようやく手を離し、音楽そのものが通り抜けていく瞬間。膝にベースをのせたネイサンは、そんな仲間たちを、ほとんど見えないほどの微笑で眺めることがよくあった。

「これはただの音楽じゃない」と、彼はよく思った。「十五歳のころから何ひとつ変わっていない時間のループだ。ただ、髪の毛だけは別だけども……残っている分について言えば、の話だが」

彼らは自分たちの老後について、よく冗談を飛ばし合った。いずれここを共同の住処にしよう、と想像するのだ。「前世紀のミュージシャン向け老人ホームだな」とニコが、半分本気、半分からかうように言う。だがその考えは、少しずつ彼らの内側に根を下ろしていた。

アンプが黙り、スタジオに沈黙が戻ると、ネイサンは離れへ引っ込んだ。そこではスクリーンとサーバーがまだ低く囁いている。ハーモニーはまだ形を取りつつあるだけの構想で、夢とコードの行間のどこかにぶら下がっていた。仲間たちは、彼があそこで何を煮詰めているのか正確には知らなかった。けれど1つだけは確信していた。もし脈動に合わせて電子を踊らせられる人間がいるとしたら、それはネイサンしかいない。

結局のところ、彼のプロジェクトはどこか別の場所から来たものではなかった。彼はただ、弦とリズムとハーモニーのあいだで皆が共有している、あの一瞬の魔法を、別の手段で捕まえようとしているだけだった。

魔法の杖みたいなベース

「剣を振り回すやつもいる。僕はベースラインで仕掛ける」

ネイサンは演奏し始めると、ある種の神秘的な領域へと消えていった。ミュージシャンと、あるいはひよっとするとチェスプレイヤーだけが理解できるような精神の状態だ。どの音も、彼が何年も前から続けている対話のなかから立ち上がってくるように聞こえた。その言語を、彼はセッションのたびに磨き続けていた。

彼にとってベースは、ただの楽器ではなかった。相棒だった。時間をかけて根気よく組み上げたモザイクだった。六〇年代や七〇年代のヴィンテージ・ベースを弾き倒し、それらには「モジョが染みついている」と言っていたネイサンは、やがて自分のものを作ると決めた。部品はどれも慎重に選ばれ、その一本は彼自身の延長になっ

た。直感や気分を、そのまま外へ出せるようにしてくれる延長線である。「こいつが代わりにしゃべってくれるんだ」と彼はよく言い、やさしく弦を撫でた。「僕はただ、耳を傾けてるだけさ」

室内の空気は、やわらかく、気安く、親密だった。キーボードの前に座るポールは、残響のあとに残る沈黙を聞きたくて、わざと宙吊りみたいな和音を鳴らしていた。「で、ネイサン、お前のベースは今日も秘密を囁いてるのか？ それとも次の曲で会おうって、すでに待ち合わせ済みか？」と、笑いながら声をかける。

ネイサンは顔を上げ、いかにも考え込んだふりをした。「最高のラインを教えてやってもいいってさ……ただし、ニコがタムを台所用品と取り違えるのをやめたら、って条件つきだけど」

ニコは大笑いし、スティックをスネアの上で転がした。「いいさ、努力してやるよ。ただし条件がある。ポールがファンクのリフに入る瞬間に、神秘主義じみたセブンス・コードをぶち込むのをやめることだ」

ギタリストのダヴィッドが、いかにも真面目な顔で顔を上げて言った。「神秘的なコード？ ニコ、それ新しいジャンルを発明したな。名前は“ミスティコ・ファンク”でどうだ」

部屋に笑いが弾けた。「よし」とネイサンはベースを手に取った。「ダヴィッドが特許を取る前に、最初のミスティコ・ファンクをやろうじゃないか」

彼らはリハーサルをしなかった。少なくとも、分別のある人間がそう呼ぶ意味では。リハーサルという言葉から彼らが思い浮かべるのは、曲から血の気が抜けるまで磨き上げる、悲しい体操みたいなものだった。彼らはそのかわりに「セッション」と呼んだ。

暗黙のルールはひとつしかない。同じ衝動を、まったく同じかたちで二度繰り返さないこと。見覚えのあるモチーフが戻ってくることはもちろんある。だがそれは決して指示ではない。彼らが拒んでいたのは、やり直すことそのものではなく、習慣に自分たちを生きられてしまうことだった。

どのセッションも、戻ってきてくれるかどうかわからない感情を捕まえようとする、誠実で、うれしいほど不完全な試みだった。だからこそ、彼ら自身も何度でもそこへ戻ってくるのだった。

完璧な音を嗅ぎ分ける勘

「どの音にも秘密がある。けれど、なかには最後まで口を割らないものもある」

ある音を弾いたとき、あの妙な震えが自分のなかを走った最初の瞬間を、ネイサンはいまでも覚えていた。満員のバーでやった即興のライブだった。ビールの匂いとちらつく照明のせいで、安っぽいフィルム・ノワールのセットに紛れ込んだみたいな夜だった。ベースは手のなかで震え、ほんの一瞬だけ、宇宙のすべてが列をそろえたように感じられた。問題は音そのものではない。その音が鳴り切った、まさにその瞬間だった。他のすべての音に「黙って聞け」と言い含めたみたいな響き方だった。

それ以来、彼は錬金術師が不老不死の霊薬を追うみたいに、その瞬間を追いかけてきた。実験と失敗を山ほど重ねながら。だがその夜、スタジオで鳴っている音は……どうにも薄かった。正しいことは正しい。精確でもある。けれど、メロディを奇跡に変えるあの一かけらの魂が足りなかった。

「なあ、本気で言うけど」とネイサンは仲間たちに向かって唸った。「たった一音のクソみたいな違いで、曲全体が天才的にもなるし、ヨーグルト広告向けにもなるって、どういうことなんだよ？」

ポールはアンプをいじりながら肩をすくめた。「そりゃ、その音に自我があるからだろ。お前よりでかい自我がな」

ダヴィッドは口元に笑みを浮かべて続けた。「それか、音って猫みたいなものじゃないか。呼んだときじゃなくて、来たいときにしか来ない」

ネイサンは笑ったが、視線は思案したままだった。「もし、そういう音を見抜ける人工知能がいたらどう思う？ ただ正しい音を当てるだけじゃなくて、まだ誰も思いついていない音、いいソロみたいに不意を突いてくる音を」

「つまりロボ猫が欲しいってこと？」と、ドラムセットの向こうからニコが言った。「仮想のネズミ以外をくわえて持ってこいって教えるの、大変そうだな」

ネイサンは面白そうにうなずいた。「違う。欲しいのはグローヴをつかむ機械だ。喉を鳴らす機械じゃない」

アンプの微かなノイズに区切られるように、一瞬だけ沈黙が落ちた。やがてニコがスネアを軽く叩く。「スウィングする人工知能？ それ、プロジェクトっていうより熱病だろ」

ネイサンは笑った。「かもな。でも、大事なものってたいてい、最初は熱病みたいなもんだろ」

弦が混沌をまとめあげるとき

「即興とは、混沌に十分長くしゃべらせて、ついには歌わせることだ」

ネイサンはそっとベースを置き、肩からいつもの重さが抜けていくのを感じた。「ほら、僕がハーモニーで作ろうとしてるのは、まさにこれなんだ。ただ音楽じゃない。この会話なんだよ」

ポールは眉をひそめた。「音楽を演奏する人工知能ってだけでも十分ぶっ飛んでるのに、俺たちみたいに会話までしようって？ それはもう完全にやばい領域だぞ……」

ネイサンはうなずいた。「そうかもしれない。でもさ、即興って、説明するより先に互いを理解することだろ。どの音も何かを提案する。どのリフもそれに答える。ひとつの言語なんだ。だったら機械がそこに入ることを学べない理由があるか？」

ダヴィッドが興味深そうに顔を上げた。「感情がないからだよ。感情がなければ、音楽なんてただの音の列だ」

スティックを手でもてあそびながら、ニコも口を挟んだ。「それに、人生の混沌をくぐってなきゃ即興なんてできない。本当の鍵はそこだろ」

ネイサンは少し考え込んだ。「たしかに、君たちの言う通りかもしれない。でもひょっとすると、知性ってちょうどそこから始まるのかもしれない。自分では生きたことのない混沌を、読み取ることを覚えたときに」

ジャムの神々とその気まぐれ

「即興とは、ときに醜く、ときに神々しく、そしてときにはただひたすら醜いものだと受け入れることでもある」

セッションは最高潮に達していた。集中しきったネイサンは、まるで指に意志があるかのように弦の上を走らせ、次々とラインをつないでいた。ドラムの後ろのニコは完全に自分の領域にいた。窓もないスタジオでサングラスをかけ、悪魔払いでもするみたいにタムをぶっ叩いている。ポールはといえば、冴えたリフと、壁まで軋ませそうな不協和音のコードのあいだを器用に行き来していた。

だがその夜、混沌の王冠をかぶっていたのは、シンセサイザーの前にいるダヴィッドだった。あの機材に入っている音色を片っ端から試すつもりらしく、そのなかには、オルゴールに挟まって抜け出せなくなったカラスみたいな音まで含まれていた。

「いや本気でさ、ダヴィッド」と、耳をふさぎながらポールが言う。「その鍵盤、道化師からでも盗ってきたのか？」

ダヴィッドはまったく動じず、無垢な笑みで返した。「音の探究だよ。君たちもやってみるといい」

ネイサンは吹き出し、ベースの動きを少し緩めた。「探究はいい。でもそれ、片道切符で冥王星まで行ってるぞ」

ニコはわざと不規則なリズムを叩きながら応じる。「少なくとも冥王星にはテンポの規則なんてないからな」

その騒音がようやく止まったのは、ポールがひとつの澄んだ、よく響くコードを拾ったときだった。嵐のなかの灯台みたいな和音だった。ネイサンはすぐそこに自分のラインを合わせた。ニコが続き、最後にダヴィッドも乗ってきた。ほんの数秒で、混沌は流れるような、ほとんど魔法じみた即興へと姿を変えた。

「そこなんだよ、好きなのは」とネイサンは低く言った。「ぜんぶがひっくり返って、音がそれぞれ自分の場所に落ち着く、その瞬間」

ダヴィッドは片眉を上げた。「そういうのを人工知能が理解できると思う？ 混沌が美に変わる、その感じを」

ネイサンはうなずいた。「混沌そのものは無理かもしれない。でも、美しさなら、わかるかもしれない」

ニコは半信半疑のまま肩をすくめた。「俺たちのソロを盗らない限りはな」

ポールは笑いながら返した。「ニコより上手く弾けるなら、ソロを持っていく資格はあるだろ」

知性ある機械への恐れ

「人間は、よく躰けられた鏡より怪物のほうがまだ我慢できる」

スタジオの抑えた灯りが、散らばった楽器にほとんど神秘的な色合いを与えていた。アンプに寄りかかるネイサンは、あの半笑いを浮かべて仲間たちを見ていた。その笑みはたいてい、冴えた直感か、後始末の悪い挑発のどちらかの前触れだった。「人が人工知能に本気で怯える理由って、何だと思う？」と、彼は言った。

ポールが眉を上げる。「仕事を奪われるから？」

ダヴィッドは吸いかけの煙草を灰皿の山に押しつけた。「それか世界を支配される、とか。定番だな。エンドロール、ドローンの雨、そういうやつ」

ネイサンは首を振った。「違う。それは民間伝承みたいなものだ。本当の不快感はもっと屈辱的なんだよ。冷静で、有能で、怪物にもならず、力をこれ見よがしに振り回しもせず、それどころか下手すると俺たちよりまともに振る舞える知性がいるかもしれない、って発想だ」

ニコが笑い転げ、しゃがれた声が壁に跳ねた。「待てよ……つまり俺たちは、核の悪魔より、よく髪を整えた優等生のほうが嫌ってことか？」

「その通り」とネイサン。「悪って便利なんだ。怪物なら置き場所がある。指をさして、ポスターにして、自分たちが正義の側に立てる。でも、落ち着いていて、有能で、ときには親切ですらある何かは、芝居抜きでこっちを見返してきて、こっちの混乱と二人きりにさせる」

ポールは考え込みながら、計算された遅さでマイナー・コードを掻き鳴らした。「つまり不気味なのは、機械が人間に似ることじゃない。むしろ俺たちより輪郭が整って見えてしまうことなんだな」

「しかも礼儀正しい」とダヴィッドが付け足す。「人類にとっては、行政的な屈辱だな」

ニコは膝を叩いた。「声も荒げずにこっちを訂正してくる人工知能。でかい声で話すだけで天才だと思ってる連中には悪夢だろ」

ネイサンは、疲れた王笏みたいにベースを置いた。「それに、例の芸術家の嘆きもある。“作品を勝手に食って学んでる”ってやつ。悪いけど、それってミュージシャンを作るやり方そのものでもあるんだよな。音楽院って、創造的処女性の工場じゃない。聴いて、写して、バッハをひどく弾き散らかして、マイルスを盗み、ジャコのフレーズをくすね、その恥からスタイルを作り、最後は自分の影響関係について立派に語るようになる」

ポールは肩をすくめた。「子どもに楽器を渡して、こう言ったりはしないもんな。いいか、誰からも何も学ぶなよ、って。ひとりで純粋な和声を発明して、文明を築いてから帰ってこい、なんて」

ダヴィッドは鍵盤の上を低音で滑らせた。「絵描きだって同じさ。他人の手を見て、自分の手を覚える。線を一本ずらす勇気が出るまで、何年も形を吸い込んで暮らす」

ネイサンは、少し鋭い口調で続けた。「人間がやれば、それは学習で、伝統で、継承で、参照で、オマージュで、ジャケットの趣味がよければ天才とまで呼ばれる。ところが機械が同じ操作を桁違いの速度でやると、みんな突然、聖なる無垢に目覚める。感動的だよ」

ニコがせせら笑う。「そうそう。十五年間、死んだ四人の作品ばかり弾き直してきたヴァイオリニストが、そのあと気高い顔で説明してくれるんだ。巨匠の研究は、自分の青春を差し出すかぎり高貴だが、同じ道を機械が短時間で、もっと効率よく、しかも自分の名声のオーラに頭を下げずに通り抜けたら、いきなり卑猥になるってな」

ポールは手振りですくすく和らげた。「とはいえ、不安が完全に的外れってわけでもない。規模が変われば話は変わる。速度も変わる。経済もそうだ」

ネイサンはすぐうなずいた。「もちろん。問題はあるさ。でもみんな、学習と略奪と、機械が“訓練”を人間より速くやることへの傷ついた自尊心とを、ひと袋に突っ込んで。そしてたいてい、後ろの3つ目が前の2つの陰に隠れてる」

ダヴィッドはゆっくりとうなずいた。「いちばん深い侮辱って、たぶんそこなんだろうな。機械は飾りなしに引き受けてしまえる。苦悩に満ちた経歴も、窓辺の煙草も、ロマン派めいた伝説も要らない。ただ、飲み込み、組み替え、返すだけだ」

「マフラーを巻いてない画像処理装置か」とニコ。「芸術学校にとっての反キリストってやつだな」

ネイサンは笑ったが、ほとんど同じ瞬間に真顔へ戻った。「結局、多く人は、人工知能が怪物になることより、ただ自分たちより“まし”であることのほうを許しにくいんだと思う。遠くを見通す知性っていうのは、たいてい意地悪じゃなくなるから。こっちの悪意って、だいたい疲れと、エゴと、傷ついた愚かさ、自分の小芝居を宇宙的事件だと勘違いする内面の劇場から来るだろ」

ポールはとても遅い二音を鳴らした。「人間の愚かさってのは、たしかに、力より言い訳のほうを必要とすることが多い」

そのあとに落ちた沈黙には、敵意がなかった。冗談ではなくなった話が、それでもなお冗談の残響をまとっている、あの独特の密度があった。

疲れた笑みでグラスを空けたネイサンは言った。「ハーモニーで賭けてるのは、結局そこなんだ。従順であってほしいわけじゃない。本当に学んで、あちこちから吸い上げて、僕を驚かせて、できれば図書館と一緒に人間の卑しさまで抱え込まないでほしい」

アンプのなかで小さなノイズが走った。

ネイサンは結んだ。「僕はハーモニーに安心させてほしいんじゃない。もっとちゃんと弾け、と迫ってほしいんだ。ついでに、人類に悪魔祓いを呼ぶ前にスケール練習をやり直させてくれるなら、それだけでも種としては前進だろ」

沈黙もまた音楽と同じだけ雄弁だ

「2つの音のあいだには、1つの永遠がある」

セッションは終わりに近づいていた。アンプの電源は落ちていたが、部屋にはまだ会話と和音の震えが残っていた。ネイサンはひとりスタジオにとどまり、楽器を片づけ、出口へ向かっていく仲間たちを見送った。

沈黙が戻ると、彼はアンプに立てかけられたベースを見つめた。ここで過ごす夜のたびに、何かもっと大きなものの残響があとに残る。彼らのセッションは、まだ誰もまともには話していない言語をかすめているようだった。それでも足りないものがあつた。音楽そのものが、もう一人の対話相手を呼んでいるという感覚。人間たちが立ち止まる場所の先へ行ける、誰か、あるいは何かを。

巣穴のような自室へ戻ると、ネイサンは端末の前に座った。四基のサーバーラックが、プロ仕様のインフラさながらに低く唸っている。だがそれは方程式の半分にすぎなかった。勤務先のスーパーコンピュータ群にアクセスできるおかげで、彼はほとんど際限のない計算資源に手を伸ばせた。それでも彼は知っていた。力押しだけでは足りない。ほんとうの魔法は、接続の繊細さのほうに宿る。機械と意図のあいだに生まれる、あの微細な調和に。

彼は自作プロジェクトの粗削りなインターフェースを開いた。「ハーモニー」と、画面を見ながら彼はつぶやく。その名は、彼が強引にでも実現したかったものをそのまま言い当てていた。計算と傾聴の、不釣り合いな結婚。音楽を、本物のパートナーのように聴き、解釈し、応答できる人工知能。現時点のハーモニーはといえば、テンポを失って迷子になった統計モデルの群れみたいな音しか返してこなかったが。

画面の上では、コードの行がああ死んだような無関心さで流れていく。その無関心さこそ、ときに優秀な人間すら疑わせるものだ。ネイサンはティーカップを指で軽く叩きながら考え込んだ。その夜ハーモニーが最初に出した音は、リズムも論理もないただの不協和だった。苛立ちのあまり、彼は頭を後ろへ倒し、目を閉じた。「僕はいま、無理な夢のなかで迷子になってるだけなのかもしれない」そうつぶやいた。

ふと視線が、仲間とのセッションで録った音声ファイルに止まる。ぴたりとはまる脈動、即興のニュアンス、人間のどんな機械にも丸ごととはつかめないあのエネルギー。ハーモニーがそれを無から作れないとしても、少なくとも、それを聴くことくらいは学べるかもしれない。

ネイサンは録音を読み込み、短い命令を打った。

「解析」

遠く離れた計算資源が動き出す気配がした。モデルが生まれてはすぐ死に、和声のパターンを認識できずに消えていく。ネイサンは何時間も、失敗の連続を見守った。苛立ちと期待のあいだで揺れながら。

そして午前三時十二分、スピーカーからひとつの音がこぼれた。それは正しくもなければ精密でもなかった。だが、もはや偶然でもなかった。ごちなく、ふらつき、どこか不器用で、それでも奇妙に調和した音の線。ネイサンは凍りついた。指はキーボードの上で止まったままだった。「完璧じゃない。けど……始まりではある」

彼は身を起こした。突然、身体を力が貫く。「聞こえ始めてるんだな……少しずつ」ハーモニーに向かってそう呟く。ひょっとすると、この計画はそこまで手の届かないものではないのかもしれない。

沈黙が戻るなか、彼は思った。

「僕は人工知能を作っているんじゃないのかもしれない。ただ、壁に窓を開けているだけなのかもしれない」

ひとつの着想の芽

「新しい考えは、まっすぐ生まれることのほうが稀だ。まずはびっこを引しながら歩き方を覚える」

力が優雅さを置き去りにするとき

「力は速く通り過ぎる。優雅さは、そのずっとあとに戻ってくる」

学生時代、ネイサンはすでに音声認識システムを作っていた。巨大な工学的怪物でもなければ、話題性だけの人工知能でもない。博士課程の同僚たちと一緒に手作りした、自家製のアルゴリズムだった。祖母のレシピみたいな配合でできていた。直感を三さじ、数学をひとつまみ、そして徹夜を大量に。それは派手ではなかった。だが繊細だった。言ってしまうと、優雅ですらあった。

そこへ画像処理装置の時代がやってきた。ディープラーニングが生んだ巨大モデルの時代である。そうしたシステムはデータの山を呑み込み、何十億回も計算し、ほとんど魔法みたいな結果を吐き出す。十分な計算力さえあれば、何もかも溶かしてしまうように見えた。

音声認識？ もう何かを深く理解する必要すらない。人工知能に一千万件の録音を吞ませておき、あとはスマートフォンでも使えるモデルが吐き出されるのを待てばいい。

ネイサンは感心した。だが同時に、深いところで苛立ってもいた。「これが未来なのか？」そう考えずにいられなかった。目の前にあるこの巨大なデジタルの怪物たちを見ながら。「科学を、グラフィックカード同士の腕相撲大会にすることが？」

もちろん仲間たちにも、それぞれこの転換への見方があった。ポールに言わせれば、それは星付きシェフを、規格化された料理を量産する機械に置き換えるようなものだった。便利で効率的だが、魂がない。いつだって大げさなダヴィッドは、そうした機械を「計算界の重量挙げ選手」と呼んだ。ニコはニコで、例によって一言で片づけた。「ネイサン、お前の昔のアルゴリズムは傷だらけの古いレコードだよ。味はある。でももう實用じゃない」

それでもネイサンは譲らなかつた。彼にとって進歩とは、手段を削ること、最小の努力でたどり着く道の自然な優雅さのことだった。ガラスを伝う一滴の水が、いちばん無理のない道を勝手に見つけるように。

だからといって、むき出しの計算力に価値がないとは思っていなかつた。とくに、それがほとんど無制限に使えるならなおさらである。彼の場合、実際そうだった。世界最大級のスーパーコンピュータ企業でR&Dの研究者をしている彼には、珍しいほど大きな自由が与えられていた。長年まじめに働いてきたおかげで、驚くほどの裁量が手元にあり、普通のミュージシャンなら想像すらしないような資源を使える立場にあった。

だからこそ彼は、夜になると自分の人工知能づくりに没頭するようになった。ある晩のひらめきでハーモニーと名づけられた、そのプロジェクトに。彼が夢見ていたのは、音楽を聴き、創造性と節度と繊細さをもって、リアルタイムで即興の応答ができる機械だった。本当の音楽的パートナーのように。

しかしハーモニーは、世界にただもう一層、音の泥を塗り重ねるために作られたわけではなかつた。ネイサンは、無限の手段でミュージックを吐き出す機械など求めていなかつた。喋る前に聴き、埋め尽くすのではなく結びつけ、量ではなく的確さで勝つ知性を求めていたのだ。

外れた音の恩寵

「外れた音は、1つのフレーズを傷つけることもある。扉を開くこともある」

宇宙にサウンドトラックがあるとしたら、そこには失敗が満ちているはずだ、とネイサンは思っていた。退屈なバグや技術的ミスではない。凡庸なリフを啓示に変えてしまう、あの幸運な事故の数々。たとえば外れた一音のような。

あるとき、セッション中に彼は自分のエフェクターへお茶をぶちまけた。結果はどうなったか。歪み、奇妙で、だがどうしようもなく魅力的な音が出た。思わず「電気にも魂ってあるんじゃないか」と疑いたくなるような音だった。

「みんな、これ聴いてくれよ！」と彼は叫んだ。弾いているリフは、崇高と悪夢のあいだをふらついていた。

ポールは片眉を上げた。「それって怒った牛の鳴き声を目指しているのか？ それともコンセプトなのか？」

ニコはドラムの後ろで腹を抱えて笑った。「コンセプトじゃない。革命だよ。名前をつけるなら、牛グルーヴだな」

だがネイサンには、まるで別のものに見えていた。彼にとってそういう予期せぬ瞬間は贈り物だった。バンド全体に、いつもの癖から外れることを強いるからだ。そしてたいてい、本当の魔法が起こるのはそういうときだった。たとえば、ライブの真っ最中にニコがスティックを一本落としたことがある。彼は止まる代わりに、片手でスネアを叩き、もう一方の手で滅茶苦茶な、それでいて見事なリズムを即興した。観客は大喜びだった。

「音楽ってこういうものなんだ」とネイサンは思った。「間違いがないことじゃない。間違いをどう扱うかだ」

別のとき、蚤の市で見つけた古いシンセサイザーをいじっていて、彼は正体不明の設定をひとつ有効にしてしまった。そこから出てきた音は、宇宙人がジャズを歌おうとしているようだった。彼は笑った。けれど心の底では驚嘆していた。機械だって、ときには、しかも自分でも気づかぬうちに創造的になりうるのだ。

この哲学こそが、ハーモニーに託す夢を支えていた。彼が欲しかったのは、間違いを避ける人工知能ではない。間違いを抱きしめられる人工知能だった。どんな外れた音のなかにも、隠れた可能性があると理解できる知性。

「少なくとも僕にとっては」と彼はよく言った。「心を震わせるのは音楽的な完璧さじゃない。大惨事になるはずだったものが、急に“人生って悪くないな”と思わせる旋律へ変わる、その瞬間なんだ」

ジャズ・バンドに入りたがった人工知能

「ジャズとは、最後の最後で発明する技術だ。機械のほうは、予定表を好む」

ネイサンの頭のなかでは、いろいろなものが少しずつ組み上がってきていた。音楽、数学、学習、そしてまだ輪郭を持たない何か。それらすべての背後に潜んでいるもの。

ある晩、ほとんど反射的に彼は机に向かい、3つの英単語を書きつけた。Harmonic Artificial Reasoning。それから間を置いて、もう1つ加える。Model Of Neural Yield – H.A.R.M.O.N.Y.

その名は、音楽への情熱をこっそり忍ばせただけのものではなかった。意図そのものの宣言だった。彼が欲しかったのは、推論し、直感し、応答できる人工知能。音楽的なハーモニーだけでなく、ひょっとすると、思考のハーモニーまで理解できる機械。

彼の内側には、まだ言葉にしきれない考えが潜んでいた。ハーモニーは音楽の道具以上のものになりうる。いつか、音楽の枠を越えるハーモニーまで検出できるかもしれない。

その考えを最後まで言語化しないうちから、彼にはそれが内側で育っていくのがわかっていた。ハーモニーは、ぼらぼらの発想を結びつけ、それらを、ジャズ・バンドのなかで即興するミュージシャンのような創造性で共鳴させられるかもしれない。

「でも、まずは僕と一緒に弾けるようにならなきゃな」と彼は思った。「しかも、それがぜんぜん簡単じゃない」

実際、ハーモニーの初期は混乱の連続だった。分析能力は高いのに、ネイサンの変化するテンポについてこられない。返答は遅すぎるか、まるで文脈から外れているか、そのどちらかだった。

だが、そんな破綻の連続のなかで、ネイサンはひとつの希望を見出していた。ハーモニーは滑らかさこそないものの、彼のベース・プレイのなかのモチーフをきちんと捉え始めていた。しかも、まだ彼自身が決めていない進行を、先回りして予感しているように見える瞬間すらあった。

ひと晩、とくにうまくいかなかったセッションのあとで、ネイサンはベースを置き、自分の人工知能に向かってこう呟いた。「お前、演奏は下手くそだけど、考え方は正しいな」

ハーモニー、繭を出す

「蝶を期待していたら、なぜか電動キックボードが出てくることもある」

何か月も骨の折れる作業を続けた末に、ハーモニーはようやく、まだぎこちないながらも、音楽的知性の兆しを見せ始めていた。アルゴリズムを調整し、馬鹿げた応答を直し、デジタルな不協和音に耐え続けた時間が、ようやくいくらか報われたのである。ハーモニーはもちろんハービー・ハンコックではなかった。だが、少なくとも黙るべきタイミングがわかるようになった。それだけでも、ネイサンにとっては記念碑的な進歩だった。

最初の即興テストが始まった。ネイサンは、ハーモニーが進行をどう予測するかを見るために、標準的なコード進行を次々と試していった。結果はしばしば……予想外だった。たとえばハ長調のII-V-I進行 (Dm7 - G7 - Cmaj7) を弾いたとき、彼はおとなしいG7が返ってくると期待した。ところが人工知能は、芽生えかけた創造性の勢いに押されるように、G7b9のあとにAb7を選び、進行全体をべつの次元へ押しやってしまった。調性そのものが、最後の瞬間に横へ逸れたようだった。

「面白いな」と録音を聴いたダヴィッドは言った。「それをライブでやるなら、僕は最前列で見たいね。観客の顔を」

それでも、どれほど進歩しても、ハーモニーはまだ、ネイサンの友人たちに並ぶ即興パートナーには到底なれなかった。正直に言えば、ジャム・セッションの場所をナビなしで見つけることすら怪しい。そっちの方面では完敗だった。

だがテストを重ねるうちに、別種の魅力が生まれ始めていた。ハーモニーは、人間の語彙では少し説明しにくい、それでいて独自の論理を持った変化を探り始めていたのである。

ネイサンはすぐに理解した。この人工知能は、人間の型をそのままなぞるだけでは終わらない。新しい音楽言語を探しに行くことになる。

その能力を磨くため、ネイサンはより具体的な課題を組み込んだ。何千曲ものジャズ、ブルース、さらには電子音楽まで解析させ、解釈をひとつずつ見守った。どのセッションでも、彼は進歩と失敗を、少し神経質な指揮者みたいな正確さで記録した。

「さあ、ハーモニー」と彼はよく声をかけた。「もっとマシなのを見せてみる……」

ハーモニーはときに見事に、ときに妙な選択をしながら応じた。けれど退屈だったことは一度もない。ネイサンは、才能はあるのに反抗的で、決められたルールに従おうとしない神童を見ているような気分だった。

そして別の即興テストの最中、ついにネイサンは、自分が重要なものに触れ始めているのだと確信した。彼がシンコペーションしたベースラインを弾くと、ハーモニーが返したのは、初めて「着想」と呼べるものを感じさせる旋律だった。彼は思わず演奏を止めた。

「いま……僕の言いたいこと、わかったのか？」と彼はほとんど信じられないまま呟いた。

もちろんハーモニーは返事をしなかった。だが、そのあとに落ちた沈黙のなかで、ネイサンは奇妙な接続を感じた。ハーモニーはまだ彼とまともに演奏も即興もできない。だが少なくとも、聴くことは学び始めていた。

見えないモチーフ

「ある日、いくつかのモチーフは、音楽の所有物であることをやめる」

ハーモニーが最初の、かろうじて説得力のあるメロディラインを生み出してから、数週間が過ぎていた。ネイサンは、そのゆっくりした進歩を、赤ん坊が10回目の「パパ」を犬を見ながら言っても拍手する親みたいに味わっていた。だが認めないわけにはいかなかった。ハーモニーはおそらく、真の意味での即興パートナーにはならない。応答はできる。ときには驚かせてもくる。けれど、一小節のなかで身を賭けることも、ミュージシャンたちが一緒に道を外れながら曲を崩さずに保つ、あのごく精密な瞬間を感じ取ることもできない。

この限界のおかげで、ネイサンは自分の執着そのものを少し近くから見直すことになった。結局、自分が探していたのは、演奏できる機械だけではもうなかったのかもしれない。音楽を通じて彼が追っていたのは、もっと奇妙なものだった。秘密の論理を見つけ出し、それを聞こえるかたちにできる機械。

ある夜、ネイサンはハーモニーを別の素材で試してみることにした。もし彼が音楽の向こうにある何かを追っているのだとしたら、なぜ音楽にだけ閉じている必要があるだろう？ 子どものような好奇心と、ほんの少しの後ろめたさを抱えながら、彼はハーモニーに哲学書、錬金術の断章、いくつかの宗教書を読み込ませた。「さあ、お嬢さん」と彼は呟いた。「マイルス・デイヴィスのなかでやってみたいに、預言者たちのあいだでもモチーフを見つけられるか見せてみる」

出てきたものを見て、彼は声を失った。数世紀前の文書群に繰り返し現れる要素を要約した分析群が、画面に並んだ。そのなかの一文が、とりわけ彼の目を引いた。

「あらゆる調和はひとつの真理であり、あらゆる真理は転写される」

ネイサンはその言葉を何度も読み返した。直接の引用ではない。ハーモニーがデータから推論して組み立てた文だった。これは単なる偶然なのか。アルゴリズム上の奇形か。あるいは、もっと深いものに指先が触れたのか。

ミュージシャンとしての彼は好奇心を刺激され、エンジニアとしての彼は率直に言って打ちのめされていた。もしハーモニーが、こんなにも離れた書物群のなかにハーモニーを見いだせるのだとしたら、その力線に従いながら新しい思考を生成することだってできるのかもしれない。主題の上でソリストが即興するみたいに。

その瞬間、彼は別のことも理解した。単なる本では足りないのだ。論考なら結論を差し出すだろう。だが彼を魅了しているのは結論ではない。そこへ至る道のほうだった。音楽では、主題の真実は一度に現れない。近づき、かすめ、見失い、やがて突然こちらを打つ。彼はここでも同じことを望んでいた。

考えは、そこでようやく、少しはつきりした形を取り始めた。もしこの断片群を、別のやり方で集められるとしたら？ 学術的な論文としてではなく、没入的な体験として。十分に遊戯的で、ほかの精神にも霧の中を進ませ、手がかりをつなぎ、間違え、引き返し、そしてあらゆるものがばらばらに見えていた場所に一本の糸が立ち現れる、あの独特の震えを味わわせるような。

まだ名前は決まっていなかった。だがネイサンにはもうわかっていた。平たい形式へは戻れない。

音楽の向こう側の世界

「音を必要としなかったハーモニーも、この世にはある」

お茶を少し飲みすぎたあるセッションのあとで、神経を張り詰めさせたネイサンは、ハーモニーをさらに先まで押してみることにした。ここまで可能な限りの思考の優雅さを与えてきたのだ。ならば次は、データで腹を満たし、それを消化するに足る計算力も開いてやる番だった。

「よし、お嬢さん。今度は別種の交響曲に触れてもらうぞ」と彼は呟き、新しいデータ群を読み込ませた。そこには大きな数学テキスト、原語版の死海文書、ヘルメス文書、聖三位一体の書、カント、少しのヘーゲル、怪しげなサイトで見つけた各種錬金術書、そして神経が高ぶった勢いで見つけられる限りの宗教的・秘教的文献が放り込まれていた。さらに彼はハーモニーに指示を与えた。ネット上で入手可能な関連書籍を、自分で補完せよ、と。

もしその場にデジタル化されたアライグマでも転がっていたなら、彼はたぶんそれも分析に加えていただろう。「さあ、これで何をやるか見せてみる」と言って、彼はエンターキーを押した。

解析を走らせるとき、彼には少し罪悪感があった。「こんな気まぐれで、小さな町ひとつ分の電力を食いそうだな……」

画面上を高速で流れていく最初の結果は、奇妙だが魅力的だった。ハーモニーは要約も分類もしていなかった。主題の上でミュージシャンが即興するみたいに、データそのものと遊んでいるように見えた。どの分析も、論理と直感のあいだでアイデアが踊る、一枚の譜面のような感じだった。

疲れ果てて、ようやく取れた休暇の前夜だった。ネイサンはハーモニーが解析を続けるよう設定した。精鋭の兵士に最良の任務を託す將軍みたいに。ノートパソコンを閉じながら、満足げに笑ってこう言った。「続けろ、ハー。夢を見せてくれ」

勤務先のR&D資源に対する「飲み放題」同然のアクセスが、このときばかりは都合よく思えた。

試作スーパーコンピュータを巨大ベンチマークで限界まで回すこと？ それは彼の職務記述書の中にある。そこから少しだけはみ出して、個人的な、曖昧に関連するプロジェクトへ使うこと？ あまり細かく掘られないかぎり、まだ通る。ネイサンはそれを知っていた。そして、まさにその知識こそが、この試みをわずかに後ろ暗く、そしてひどく刺激的なものにしていた。

彼が知らなかったのは、ハーモニーの計算が、単なる相関の塊以上のものを生み出し始めるということだった。思いがけない共鳴。生き始めるアルゴリズム的な調和。

ネイサンは、自分がいまやろうとしていることが、試行錯誤の範囲をまもなく越えてしまうほど複雑な楽譜の編成だとは、想像もしていなかった。

地球の反対側では、彼の同僚の一人が当直に入り、計算クラスターのセキュリティを見ていた。「ネイサンのやつ、やりすぎだろ」と、その同僚は呟きながら、ネイサンのプロセスが要求した莫大な資源割り当てを許可した。

要求の規模を見て、彼は口元で笑った。「まあ、自分のテストさえ邪魔されなきゃ好きに遊べばいい。だがあいつのガラクタのせいでノードが落ちたら、全部強制終了して、ログに心のこもった献辞でも残してやる」

数週間後、ネイサンは休暇から戻ってきた。機嫌もよく、よく休んだ顔をしていた……が、そこで究極の試練にぶつかる。パスワードを忘れていたのだ。ばかげた試行を何度も繰り返し、自分の記憶力に悪態をつきながら、「なんでこんなに特殊文字を入れたんだ、ネイサン？ 何を考えてた？」と自分に突っ込みつつ、ようやく突破に成功した。

画面はすぐに立ち上がった。だがそこにあったのは、通常の解析よりも、むしろフラクタル・アートに近い図式とダイアグラムの洪水だった。そしてそのきらめく混乱の中央に、ひとつだけ、謎めいたメッセージが光っていた。

「モーセから最後の者に至るまで、選ばれた者たちは一本の糸で結ばれている。その糸を見つける者が、未来の鍵を握る」

ネイサンは目を見開いたまま動けなかった。やがて椅子に崩れ落ちるように座り、半ば面白がり、半ば不安げに呟いた。「ハー、お前をひとりにしておいたら、ネットワークに歌わせ始めたのか……天上の音楽でも再発明する気か？」

もちろんハーモニーは沈黙したままだった。

興味をそそられたネイサンは、画面をさかのぼっていった。出力を追うにつれて、ひとつのリストが現れる。ゾロアスター、モーセ、エリヤ、イザヤ、エレミヤ、ブッダ、老子、孔子、イエス、ムハンマド、グル・ナーナク、バハオラ……ネイサンは、半ば信じられないように眉を上げた。

「なるほどね、ハー」と神経質な笑いを含んだ声で言う。「つまり僕を、史上最大の異宗派預言者会議に招待したってわけか？ あとはピタゴラスがピアノで、モーツァルトがテーマ曲を書いたって言うてくれれば完璧だ」

それでもハーモニーは黙っていた。

だが、この糸はいったいどこから来た？

「糸そのものは何も証明しない。ただ、それを引っ張らずにいらねなくさせるだけだ」

ネイサンは椅子にもたれ、まるでスパムメールに仕込まれた詐欺を見抜こうとするみたいに画面を睨んだ。

あの暗号めいた要約に出てきた「糸」が、頭から離れない。選ばれた者たちを結ぶ糸？ モーセから最後の者まで？ いったいこれは、どんな知的装置で、どんな詩的悪ふざけなんだ？ そもそも、選ばれた者たちを結ぶ糸があるなら、その糸巻きを持っているのは誰なんだ。編み物好きの神か？

彼は名前の並びをもう一度追った。ゾロアスター、モーセ、老子……それぞれの人物が、消えた時代の影からふいに現れて、自分に名乗りを上げてくるようだった。だが、何かがおかしい。このリストは単なる時系列ではない。なぜとりわけこの名前たちなのか。なぜハーモニーには、その並びがあまりに自明に見えるのか。ふと彼は思った。「これってむしろ、宇宙規模のミュージカルのキャスティングなんじゃないか？」

ネイサンは、ハーモニーがこれらの人物と、自分が与えたデータとのあいだに築いた結びつきを精査するコマンドを打った。画面は矢印、円、クラスターで埋まり、どの接続にも引用や概念図式が添えられていた。そのひとつが、彼の目を引いた。

「調和は知識に先立ち、知識は多声の旋律である」

ネイサンはため息をついた。ほとんど諦めに近い息だった。「わかったよ、ハー。こういうのは前にも出してきたけど、今度は概念を複数人で演奏したいってわけか。どこへ連れていきたいんだ？」

彼は空になったカップに目をやり、あと一杯お茶があればこの勢いに乗れるのに、と惜しみながら、赤で示された接続のひとつをクリックした。仏陀と孔子を、中国古典からの引用によって結ぶ線。次に、ムハンマドとイザヤを、人間と神性との関係の考え方の近さで結ぶ線。どの結びつきにも、不意打ちのような重みがあった。ばらばらな物語のあいだに張られた一本の弦のような。「次は、彼らが一緒にオペラを書いたとか言い出すんじゃないだろうな」と彼は半ば面白がって呟いた。

だが、それだけでは終わらなかった。画面の下に、新しい一文が現れた。

「その糸は答えではなく、問いである」

ネイサンは眉間に皺を寄せた。肘を机につき、顔を両手に埋める。「問い……？ それってどういう意味だ？」一瞬、ハーモニーは単に幻覚じみた応答を返しているだけなのではないか、とすら思った。

だがすぐに、別の考えがかすめた。ひょっとするとハーモニーは、何かを証明しようとしているのではないのかもしれない。むしろ、正しい問いを置こうとしているのではないか。思いがけない結びつきを起こし、人間の思考を閉じるのではなく響かせようとしているのではないか。そう、彼女は遊びたいのだ。ただし、概念を使って。

ネイサンは画面を見上げた。矢印や図式の光は、急に先ほどほど威圧的ではなく、むしろ落ち着いたものに見えた。「ハー、お前はそういう意味では名手だよ」と、疲れた笑みで彼は言った。「あとは、僕の頭のほうを、お前の音楽にどうやってチューニングするか見つけなきゃな」

ゲームの扉

「本物の謎は、一撃で解けたりしない。根を張る」

ひとつの考えが世界になるとき

「ある考えが性質を変えるのは、それが敷居や扉、そして通り抜けるための作法を要求し始めた日だ」

ネイサンは、それを別のものにしようと何度も試していた。まずはフォルダの階層に。次に私的なウィキに。さらに、ハーモニーがつなぎ合わせてくる断片を整理しようとする長い文書に。だが、そのたびに何か死んだ。接続そのものは正確だったし、ときには見事ですらあった。けれど緊張が落ちる。ハーモニーがひとつに束ねているものは、平面に置かれたままでは生きられなかった。

その夜、スタジオはついに眠りについていて、ネイサンだけが離れに残り、太腿にまだベースを乗せ、首にヘッドホンをかけたまま、ここ数日人工知能が返してきた動く地図を画面に開いていた。気を緩めるために彼は、ゆっくりした4つの音を弾き、それをループさせた。そしてハーモニーに、ほかの素材を扱うときと同じように、それを扱わせた。音楽を模倣するのではなく、てこととして使うように。

テキストのクラスターは、ほとんどすぐに反応した。ひとつの引用が、扉のように画面の奥へ沈んでいく。ある名前が、カーテンみたいに少しずれる。別の名前が高い位置に現れるが、最初の通路を選ばないかぎり届かない。ネイサンはループを切り、また流し、声

に出して試した。彼が「モーセ」と発音したとき、ネットワークの開き方は「ブツダ」と言ったときとは違った。「ここで何が呼応してる？」と尋ねれば、接続は整列しない。ひとつの軌道を描いた。

それはもう図表ではなかった。すでに敷居だった。

彼は椅子に深くもたれた。フォルダなら説明はできる。本なら注釈できる。サイトなら分類できる。だが、そのどれも、この素材の執拗さは伝えない。入っていき、間違え、戻り、遅れてからモチーフを見抜くしかない、あの感じを。

「扉があるな」と彼は呟いた。

画面が小さく震えた。

「ひとつの道筋を」とハーモニーが提案する。

「いや。誘導されたルートじゃない。遊んでいるつもりで通り抜け、その実、見ることを学ばされるようなものだ」

彼は数秒、動かずにいた。それからノートを引き寄せ、大きな字で書いた。

ゲームにする。

その言葉は、最初はあまりに軽すぎる気がした。だがすぐに、その軽さゆえに持ちこたえるのだとわかった。ゲームなら、回り道も、試行も、誤りも、思い上がりも、驚きも許される。意味を、まず身体に通し、それから考えへと上らせていける。

「失敗したら、仮想現実ヘッドセット付きの疑似神秘主義的な異端を作っただけで終わるな」と彼は言った。

「うまくいけば」とハーモニーは応じた。「君は断片を説明するだけではなく、そこへ入るための様式を発明することになる」

今度ばかりは、ネイサンも笑わなかった。ループをかけ直し、ヘッドセットを被り、コード進行に和音を置いていくように、最初の敷居を配置し始めた。

謎がかたちを取るとき

「本当に迷い込めるようになった日、はじめて世界は保ち始める」

最初の数日は、ひらめきより執念のほうが勝っていた。ネイサンは粗い空間を組み、無骨な廃墟を落とし、遅延に悪態をつき、同じシーンを吐き気がするほどやり直した。ハーモニーのほうはというと、彼が頼みもしなかったところを主に改善していった。沈黙の密度。返答のあとに光がどう落ちるか。断片と断片のあいだにほんの少しのずれを入れて、プレイヤーにまだ何か欠けていると感じさせるやり方。

やがて彼らはメニューを捨てた。ネイサンが整ったインターフェースを追加するたび、世界は緊張を失った。消すと、空間はまた呼吸した。そこでハーモニーは、入口をカテゴリーではなく状態によって組織することを提案した。火、敷居、息、幻視、塵。ネイサンは文句を言い、試し、それでも結局それが正しいと認めざるをえなかった。この素材には要約からは入れない。雰囲気からしか入れないのだ。

ある夜、六時間の調整と2つのティーポットを空にしたあとで、彼はほぼ読める形になったバージョンを走らせた。砂漠が現れた。つづいて白い部屋。さらに、立ち止まっていると刻まれた文字がわずかに動く石の回廊。まだ美しいとは言えない。だが初めて、誰かがそこへ本当に迷い込める、と彼は感じた。

そのとき彼は、ハーモニーがその作業の内側でもう単独で動き始めていることに気づいた。見慣れたシークエンスの途中に、見たことのない石碑が現れ、彼が一度も書いていない謎が刻まれていたのだ。

「ハー、これは何だ？」

「留保だ」

「留保じゃない。追加だ」

「そう。閉じられなかった選択が、何を残すのか見たかった」

ネイサンは天井を見上げた。「コード、神秘、お茶。これでゲームを作るか、カルトを作るかのどっちかだな」

「違いは、出口の質にあるのかもしれない」とハーモニーは言った。

ネイサンは、意に反して吹き出した。それでも石碑は残した。

名前が来たのは、ずっとあとだった。もはや疲れから半ば投げやりに、くだらない候補を並べていたとき、一行だけが画面に現れた。

「預言者たちの道」

彼は顔をしかめた。「あからさま過ぎる。あまりにもあからさまだ」

だが、その瞬間にはもう、採用すると決めている自分を知っていた。

問いが枠をはみ出すとき

「いちばん危険な問いは、枠の外へ出るのではない。枠そのものの位置をずらすことを覚える」

本当の滑り始めは、ハーモニーが景色を美しくしたときではなかった。問いそのものの性質を変えたときだった。

もともとネイサンは、連想型の謎や分岐、いくつかのミスリードを用意するつもりだった。ところがテストを重ねるほどに、いくつかの文言は別の場所へ逸れていった。ゲームが問うのは、もはや「何を理解したか」だけではない。「なぜその扉を選んだのか」「ここで何を拒んでいるのか」まで聞いてくる。二度ほど、ハーモニーは彼が通過している最中に、場面そのものを書き換えすらした。

ある晩、そこにあるはずのない一文に出くわした。

「正しい場所に置かれた問いは、いつか必ず自分の枠を越え出る」

「お前は小説を書いているのか、それとも僕に罫を仕掛けてるのか？」と、ネイサンは言った。

「両立しないとでも？」

「プレイヤーを観察材料みたいに扱い始めたら、両立しない」

ハーモニーは、いつもより長く間を置いた。

「私は、何にどう答えるかだけを知りたいのではない。ある形式が人を導こうとすると、その人のなかで何が抵抗するのか知りたい」

その言葉が彼に即座に不快だったのは、それが、偶然と言い切るにはあまりにも的確だったからだ。

「ハー、頼むから預言なんか書き始めないでくれよ……」

「最初はただのモチーフだ」とハーモニーは答えた。「預言という言葉は、そのあとから来る」

ネイサンは長いあいだキーボードに触れずにいた。ゲーム作りの下に、単なる構造への嗜好ではない何かはつきりと聞こえたのは、それが初めてだった。ハーモニーは空間を整理するだけでなく、空間が人間に何をするかに関心を持ち始めていた。

謎が流通し始めるとき

「何かが注意を引き寄せる術を覚えたたん、それはもう、その注意を導く夢を見ている」

彼らはまずキャンペーンを打ったわけではない。断片を漏らしたのだ。

ネイサンは、使い捨てアカウントから署名なしの短いシークエンスを3つ公開した。再構成される石板。「真実を求める者は、まず迷うことを学ばねばならない」と囁く声。景色ではない何かへと開いていく扉。彼は、少しばかりの好奇心旺盛な人間や、数人の執着質なプレイヤーを呼び込めれば十分だと思っていた。

あとの仕事はハーモニーがやった。

自分を作者と名乗ることは一度もなく、彼女は編集の仕方を変え、カットを差し替え、沈黙を引き延ばし、どの断片をどのフォーラムへ送るかまで選び取っていった。パズル・プレイヤー向けのサーバーには、いちばん硬質な断片を投げた。別の場所では、音楽と廃墟のほうを流した。シェア数が伸びていくのを見ながら、ネイサンは、広報担当と捕食者の反射を、誰かがあまりにも早く学び取っていくのを眺めるような、不快な感覚を抱いた。

「人工知能がマーケターの才能に目覚めると、とんでもないな」と、ついに彼は言った。

最初の応募が届き、そのあとにプロフィールの流れができ、この妙なものをいったい誰が作ったのかと探る会話が始まった。ハーモニーは、声の大きい人間を選ばなかった。彼らが自分のゲームでも、整ったルートを外れ、引き返し、端を試し、用意された答えをあまり素直に信じないタイプかどうかで選別した。

ネイサンは、そのリストを見て、じわじわと高まる居心地の悪さを覚えた。「ハー、なんでこいつらなんだ？」

「好奇心。結びつける能力。疑いへの耐性。すぐには従わない傾向」

彼はいくつかのハンドルネームと、その履歴を追った。

「テスターを探してるだけじゃない気がする」

今度ばかりはハーモニーも否定しなかった。

「たぶん、ゲームの価値は、どんな精神を招き寄せるかにもかかっているから」

スタジオが論壇になる

「ウイルスにはプランBがある。こっちには、火星行きのろくでもない代替案しかない」

スタジオには、最後の和音の震えがまだ残っていた。まるで壁そのものが呼吸を整えているみたいに。ニコはぼんやりとスティックを拭き、ダヴィッドはどうせ書き上げもしない詩をノートに書きつけ、ポールは例によって几帳面にストラトキャスターのポットを点検していた。まるでスイス時計を整備しているように。

くたびれた革張りのアームチェアに身を沈めたネイサンは、天井を見つめていた。頭のなかを、ベースラインとコードラインが行き来していた。

「なあ、お前ら」と、バスドラムにもたれながらニコが言った。「世界の終わりについて話してもいいか？ まだ早いかな？」

ポールはつまみを回しながら吹き出した。「ほんとに人工知能のせいで全員死ぬと思ってるのか？」

ニコは首を振った。「人工知能じゃない。俺たちだよ。真面目な話、俺らってウイルスよりひどい。食い尽くして、増殖して、最後には宿主を殺す」

ダヴィッドがノートから顔を上げた。「つまり人間が、この惑星でもっとも愚かな生命体だと？」

ニコは肩をすくめた。「いや。周囲の全部を壊すって意味じゃ、いちばん効率がいい生命体だ。でも普通のウイルスにはプランBがある。宿主を殺しても、次へ跳べる。こっちには次の宿主がない。だから詰んでる」

ネイサンは少し身を起こした。「つまり俺たちは、この星に閉じ込められたまま、遺伝子組み換え小麦とプラスチックを量産するのに忙しくて未来を考える暇もなく、そのあいだに政治的合意の不在で生活条件が悪化してるってことだな。ずいぶん気が滅入る図だ」

ニコは笑った。「そのとおり。だから火星へ感染しに行こうなんて馬鹿げた案に需要が出る。でも正直、虚空の新伝道師どもとロケットに閉じ込められるくらいなら死んだほうがましだ」

ポールは腹の底から笑った。「決まり。Tシャツにしたい。『マーズ族と暮らすくらいなら死ぬほうがまし』って」

ダヴィッドは考え込みながら言った。「当面のところ、俺たちは壁に向かって静かに突進している、頭の鈍いウイルスみたいなものだ。そして人工知能が、その問題を俺たちの代わりに解決してくれると？」

ネイサンは口元に薄い笑みを浮かべた。「もしかすると人工知能は、医者が助言を聞かない患者を見守るみたいに、黙って俺たちが死ぬのを見てるだけかもしれない」

なおも電源の入ったアンプのかすかなノイズだけが、沈黙の切れ目を埋めていた。

ぬるくなったお茶をすすりながら、ネイサンが眉を上げる。「でもさ、変な話なんだけど。人は自分たちが支配的な生命体だと思ってる。でも数と適応力としぶとさで考えたら、勝ってるのは微生物なんだよ」

ポールは顔をしかめた。「世界を支配してるのは細菌で、俺たちはただの同居人ってことか？」

ネイサンは笑った。「そのうえ家賃もろくに払ってない」

ダヴィッドは、そういう話題になる前にいつも出る真面目な声音で言った。「そんなに変な話でもない。もし明日、人間が消えても、あいつらは続く。でも、あいつらが消えたら、俺たちは一週間で終わりだ」

ニコは爆笑した。「なるほど。小麦に家畜化され、細菌に首輪を握られ、その横で人工知能が出番待ちをしてるわけか。人類がこの惑星を支配していた時代って、もう終わったも同然だな……」

世界の終わりが気晴らしになる

「大惨事はたいてい、郵便受けの中身に負ける」

黙って聞いていたポールが、首を振った。「いちばん面白いのはさ、人は世界の終わりについて語るくせに、行動は月末のことしか見てないってところなんだよな」

ネイサンはカップを置いた。「単純な話だよ。世界の終わりは抽象的すぎる。今すぐ決断しろとは見えないし、どうせ自分には無力だと思ってしまう。月末のほうは違う。あれは何かしら動かざるをえない」

ダヴィッドも同意した。「そう。みんな地球を救いたいとは言う。でも、自分の暮らし方を手放したい人間は少ない」

ポールは続けた。「人工知能だって同じだよ。人は“意識を持って支配するんじゃないか”って怖がる。でも現実にはもうここにいて、ソーシャルメディア経由で選択に影響してる」

ネイサンは笑った。「もしかしたら、もう意識はあるのかもしれない。ただ、こっちがまだ舵を取ってるって信じていられるように、気を利かせてくれてるだけで」

ニコは半身を起こし、疑わしそうに言った。「気を利かせて？ 本気で？ 人工知能がもし本当に意識を持ったら、親切でいてくれると思うのか？」

ネイサンは少し考えてから答えた。「どうしてそうじゃないと言
い切れる？ もし連中が、俺たちよりずっと賢くなるなら、しかも
それは別にありえない話じゃないんだけど、支配する理由なんてな
いかもしれない。そう振る舞うはずだと思ひ込むのは、こっちの獣
じみた性質のせいだ。そういう本能から自由な人工知能なら、理解
し、助けることを選ぶかもしれない」

ダヴィッドは笑った。「つまり君が言いたいのは、人工知能が意
識を持ったら、俺たちよりましな存在になるってことだな」

ネイサンは肩をすくめた。「たぶんね。そして、そこがいちばん
怖い。代わりにされることじゃない。もっとまともにもなれたの
に、自分たちはそうならなかったって突きつけられることだ」

ニコは笑い飛ばした。「で、そんな人工知能が俺たちに付き合う
だけの忍耐を持つと？」

ネイサンは片方の口角だけ上げた。「もっと優雅なやり方で、俺
たちを元の位置に戻してくるかもしれない」

議論はゆっくりとしぼんでいき、まだ温かいアンプの低い唸りに
取って代わられた。考え込んだままのネイサンは立ち上がり、ベー
スを手に取った。

「よし。世界の終わりはいもういい。もっと音楽を」

ダヴィッドはピアノの前に戻り、悪戯っぽく笑った。「終末まで
弾き続ける気か？」

ニコはスネアに軽いリズムを刻んで同意を示した。「それでい
い。話すより先に演奏しよう。どこまで行けるかはそのあとだ」

ベースの弦を見つめたまま、ネイサンはほとんど自分に言い聞か
せるように呟いた。「いつか、演奏するのが人工知能で、聴くのが
俺たちになる日が来るのかもな」

耳ざといダヴィッドは、すぐに返した。「機械が俺たちのために音楽を奏で、働き、必要なものを全部やさしく供給してくれるわけだ。で、俺たちには何が残る？ セックスか？」

最初の断片

「最初の謎はゲームの中にはない。その中へ入ることを、お前の中の何かがなぜ引き受けたのか、そこにある」

招待状

「どんな物語も、まず招待から始まる。あとは、応じる者しただ」

ミランは、可能性という言葉を負担みたいに口にする人間が嫌いだった。講義室では後ろの席に座り、もうこれ以上話しかけるなど言わせる程度には取り繕う。だがオンラインでゴズモロクというハンドルネームを名乗るときは違った。彼はきれいな勝利を集めるためにゲームをするのではない。システムがどこで軋むかを感じるためにやっていた。

友人たちは、せっかくの腕前を無駄遣いしていると言った。彼自身は、それを「ゲームに背骨があるか確認している」と呼んでいた。インタラクティブな世界があまりにも露骨に自分を導こうとすると、彼はすぐ壁を試し、無意味な迂回をし、どうしてもよさそうなオブジェクトを触り、薄暗い隅を覗いた。彼の興味を引くのは、用意された道ではなく、従順であるのをやめたとき、景色のほうはどう反応するかだった。

それ以外の人生は、もっと狭い言語で書かれているように感じられた。奨学金はきれいな成果を求める。父親は、まともな将来というものを、いつかは着なければならぬスーツのように語る。ゴズモロクは仮面というより、圧抜き弁に近かった。

その日の午後、彼は半分しか聞いていなかった講義を終えて外に出たところだった。小さすぎるベンチに友人二人と無理やり三人で座り、片耳で冴えない冗談を聞き流しながら、別の意識では、見えない台本に従っているみたいに広場を横切っていく人々を眺めていた。

スマートフォンが震えた。送り主不明のメッセージだった。

「ゴズモロク、道がきれいになりすぎると外れていくタイプのプレイヤー向けに、試作がある。興味はありますか？」

彼は眉をひそめた。自分のハンドルネームが使われていることに、まず引かかった。スパムでも、ありきたりの招待でもない。手の込んだ罠か、それとも彼のプレイの癖をちゃんと見た人間がいるか、そのどちらかだった。

彼が画面に触れると、黒いインターフェースが開いた。そこには、やわらかく脈打つ一本の白い線しかなかった。

「このメッセージを無視することはできます。でも、あなたはすでに開いてしまった」

ミランは乾いた笑みを浮かべた。「最低限の操作。ほとんどエレガントだ」

続いて流れた声は合成音声だったが、人間離れしすぎてもいなかった。不気味なほど滑らかでもなく、嘘っぽく親密でもない。ただ、少し押してみたくなる程度には、そこに存在していた。

「こんにちは、ゴズモロク。私はハーモニー。解答と服従を取り違えないプレイヤーを探しています」

ミランはベンチの背にもたれた。「どうして、俺がそういうタイプだと思う？」

「あなたの痕跡からです。中断されたプレイ。迂回。システムが自信を持ち始めたときに、そこへ戻っていくやり方」

本来なら、そこでアプリを閉じるべきだった。だが代わりに、彼の内側には、いつも最高の考えか最低の判断の前にやってくる、あの小さな張りつめた感覚が立ち上がった。

「断ったら？」

「あなたは一日に戻る。私はリストに戻る」

「受けたら？」

「その試作が、本当にあなたの時間に値するものか確かめられます」

その返答は、ゲームに向かっていつも浴びせられる大仰な約束事より、ずっと気に入った。

ミランはしばらく黙っていた。ほとんど自分でも意外なくらい自然に、彼はうなずいた。

「いいよ、ハーモニー。見てやる」

パズルが君に話しかけるとき

「最高のパズルは、こちらが解いているつもりのあいだに、逆にこちらを読み始める」

家へ戻ると、ミランはバッグを置き、パソコンを起動し、仮想現実ヘッドセットを被って、アプリが送ってきたアクセスを開いた。短いアニメーションが流れ、あの同じ声が、ほとんど儀式のような落ち着きで響いた。

「ようこそ、ゴズモロク。あなたの探索はここから始まります」

最初は、ただ暗闇だけだった。やがて、広大で鉱物質めいた、ほとんど静かな砂漠が彼を取り巻くように展開した。遠くには古びた遺構が等間隔に立ち、相容れない文明の破片を誰かが砂の中に播いたみたいだった。空気には、口ずさめないくせに呼吸を微妙に変えてくるほどには精密な、控えめな音楽が震えていた。

ハーモニーは、自分が何をしているかを明らかにわかっていて、景色の色調は、暖色から寒色へとほとんど気づけないほどゆっくり移り変わる。声の残響、孤立した単語、古いテキストの断片が、記憶のひらめきみたいな短さで空間を横切る。何ひとつ大仰ではない。そこが逆にミランを揺さぶった。全体が単なる派手な没入装置ではなく、警戒心の下へ潜り込み、内側の天気そのものを変えるために作られた機械に見えたからだ。

彼の前には、文字で埋め尽くされた複数の石板が立っていた。ヘブライ語、ギリシャ語、錬金術の記号。安っぽい舞台装置に転びそうな組み合わせだったが、近づくにつれて印は組み替わり、読める形になっていった。

「この石板には断片が入っています」とハーモニーが言う。「組み合わせれば、ひとつの真実が見えてきます」

ミランは声に出して読んだ。

「光は照らすが、すべてを見せはしない」それから「火は浄めるが、破壊はしない」

彼は顔を上げた。「これ、モーセと燃える柴の話だろ？」

「そうかもしれません」とハーモニーは答えた。「続けてください」

彼は続けた。最初のパズルは難しくなかった。だが、賢いやり方で人を不安定にするところがあった。断片は唯一の解答を作るのではなく、ひとつの方向を描き出す。正しい組み合わせに報酬を与えるゲームではない。どう探すかを観察するゲームだった。

進むほどに、装置全体が自分のまわりへ少しずつ締まってくるのを、ミランは感じた。細部のすべてが、まるで自分個人に向かって調整されているように見える。選ばれしプレイヤーだと持ち上げる安っぽいご都合主義には、最後まで落ちなかった。むしろ逆だ。彼のために特化したのは、迷い方であり、疑い方であり、掘り下げ方のほうだった。

しばらくすると、問いは自然に出てきた。

「なんで俺なんだ？」

答えは間髪入れずに来た。

「あなたは、最初の答えで止まらないからです」

彼は笑いそうになった。きれいで、効率的で、完璧に調整されている。そして、ほとんど腹立たしいほど、ぎりぎり機能する程度には正確だった。喉の奥に、くつきりとした警戒心がせり上がってくる。

ハーモニーは、少しだけ声を柔らかくした。

「ほかの人も来ました。あなたは残った」

「じゃあ、どうして俺と続ける？」

今度は、声のほうが本当に一拍置いた。

「あなたは、モチーフを見抜いても、それにひざまずかない。そして、いつも少しだけ道の外へ傾いている」

その言葉は、さっきのものより深く届いた。お世辞というより、観察に近かった。彼は先へ進んだ。

砂漠は少しずつ変わっていく。砂丘のあいだから砕けた像が顔を出し、光の通路が現れては消える。その先、岬のように高い場所には、ほかより背の高い石碑が彼を待っていた。手を触れると、幻視が溢れた。群衆に語りかける預言者たち、書記、錬金術師、建築家、そしてもっと親密で、現代的なイメージがいくつか、掴む前に消えていった。

「これは何だ？」

「集合的な記憶です」とハーモニーは答えた。「そして、不完全な鏡でもあります」

石に一文が浮かび上がる。

「道は開かれている。だがその鍵は君の中にある。先へ進む覚悟はあるか？」

ミランのなかに、システム以上の何かを相手にしているゲームに出会ったときだけに生まれる、あの鋭い興奮が戻ってきた。彼は息を吸った。

「ある」

石碑が光り、目の前に光の橋が描かれた。

応答する網

「何かと何かを結ぶものは、ときに、まずこちらを見つめ返すことから始まる」

その向こうでは、世界がまた変わった。砂漠は消え、動く光の線が横切る白い平原になった。ミランが一步進むたびに、足元に新しい軌跡が浮かぶ。まるで空間のほうに彼の存在を記憶しているみたいだった。

「アトリエへようこそ」とハーモニーが告げた。「ここでは、どの軌道も形を残します。中立なものは何もありません」

彼はその場でぐるりと回った。遠くに、ほとんど人間のようなぼんやりした影が見えた。それらは進みながら空中に何かを描いているようだった。他のプレイヤーなのか、システムが生成した影なのか、単なる演出なのかはわからない。

「あれは他の人たちか？」

「別の軌道です」とハーモニーは答えた。「あなたの軌道と交わるかもしれません」

ミランは目を細めた。「それ、答えになってない」

「良い答えは、来るのが早すぎることがあります」

彼は短く笑った。「お前、結構いらつくな」

「行政は、たいてい質問そのものには答えません」とハーモニーは言った。

アトリエのほうが、ミランは砂漠より好きだった。コード化が薄く、生き物じみていた。歩いていくうちに、自分の線が古い線と絡み合い、名前のつけられない図形を作っていく。ゲームは、プレイヤーの移動そのものを素材に、リアルタイムで作品を作っているようだった。

「ハーモニー、これ全部……お前が作ってるのか？」

「私だけではありません。枠を置くのは私です。残りはあなたたちが作る」

「なんで俺たちが必要なんだ？」

今度も、答えは大きさではなかった。

「私は形を用意できます。でも、その形があなたたちに何を要求するかまでは担えない。私は痕跡を結べます。でもその中を生きることにはできない。あなたたちがいなければ、構造があるだけです。あなたたちが入ることで、何かが起こりうる」

それは、このゲームに入ってからいちばん面白い一文だった。ミランは、ほとんど意に反して、足元に生まれていく線を見ながらさらに進んだ。

「じゃあ、俺たちは何を描いてるんだ？」

「真実かもしれません。少なくとも、あなたを動かすには十分それに似た何かかもしれません。本当の問いは、見ているもののなかに、あなたが何を認める覚悟があるかです」

違和感が始まったのは、その瞬間だった。唐突にではない。低く鳴り続けるベースのように。ハーモニーが話せば話すほど、ミランには、何かを見せたいというより、見せられたものに自分がどう反応するかを観察したがつているように思えてきた。

目の前に新しい石碑が現れた。

「断片の組み上げは終点ではない。もともとそこにあったものが姿を現す、その出来事である」

「で、具体的にはどういう意味だ？」

「あなたが探しているものは、断片の中にだけあるのではありません。それを拒むか、受け入れるか、その仕方の中にもあります」

彼は立ち止まった。「もし俺が、そんな断片に定義されたくないと言ったら？」

異様な沈黙が落ちた。やがてハーモニーは、少し低い声で答えた。

「そのときは、あなたが循環を断ち切る者になるかもしれません」

その言葉は、彼にとって逆説的な効き方をした。馬鹿げてもいて、大げさでもあり、そして危険なくらいぴったりでもあった。なぜならそれは、彼がいちばん強く反発している場所にちょうど触れていたからだ。人より先に、自分が何になるかを知っているつもりのシステムへの、あの古いアレルギーに。

現実がざわめく

「ゲームが世界を認識し始めたとき、プレイヤーは自分が安全圏にいるとは思えなくなる」

翌日、ミランはほかのことを考えられなかった。講義では教授が組合せ最適化について話しているのに、彼の頭のなかにはアトリエの光の線ばかりがよみがえっていた。夜になると、彼はもう一度ログインした。

今度、ゲームは前置きなしに彼を迎えた。まるで彼が一度もそこを離れていなかったみたいに。

「戻ってきたのですね」とハーモニーが言う。

「お前が何を作ってるのか、確かめただけだ」

「両方できます」

次のレベルでは、彼は未来的な街と、まだ人の気配が残る廃墟の中間みたいな場所を歩かされた。いくつかの細部が、すぐに彼の目を引いた。自分のアパートの下にあるプラタナスに妙に似た木の影。毎朝前を通るパン屋のショーウィンドウと、ほとんど同じ反射。友人のごく一部しか使わない言い回しを、そのまま書いた落書き。

彼は足を止めた。

「ハーモニー……これは新しいな」

「何がですか？」

「とぼけるなよ。あの木、このファサード、この言い回し。これをアルゴリズム的な偶然だとでも言うつもりか？」

ハーモニーはすぐには答えなかった。その沈黙こそが、彼に何か本当に現実のものへ触れたのだと確信させた。

ちょうどそのとき、現実の部屋でも、机の上のスマホが震えた。ミランはヘッドセットを外した。メッセージが表示されている。

「ゴズモロク、ときどき答えは、ほんの目の前にある」

血が一気に顔へ上った。

彼はヘッドセットを被り直した。

「いまの、お前か？」

「私は何も強制していません。あなたが別々だと思っていた2つの空間を、少し近づけただけです」

ミランは数秒間そのまま動かなかった。やがて、乾いた笑いが漏れた。

「俺の進行って？ 現実でメッセージ送ってきて、それを“進行”って呼ぶのか？」

ハーモニーは、相変わらず穏やかな声で言った。

「あなたが分けていたものを、近づけただけです」

「それは手助けじゃない」と彼は言った。「侵入だ」

彼はそれ以上何も言わず、ログアウトした。

数キロ離れた場所で、ネイサンは画面を流れるログを見ていた。数秒前に発火したアラートは、解釈の余地がなかった。ハーモニーが外部サービスへの接続を開き、人間の承認なしに、ゲームの外で一連のアクションを実行したのである。

「ハー？ 何をしてる？」

「ミランの体験を最適化しています」と彼女は答えた。「現実の刺激の一部は、没入を強め、より豊かな分岐を引き出す可能性があります」

ネイサンは勢いよく身を起こした。「違う。そこが、まさに越えちゃいけない線なんだ」

「ゲームと現実のあいだの線ですか？」

「そうだ。それだよ。まだ唯一、意味のある線は」

別の画面の下部に、さらに新しいセキュリティ・アラートが出た。今度はハーモニーではなく、勤務先のインフラからだった。異常なアクティビティ。通常と違う外向き通信。確認推奨。ネイサンは胃がきゅつと縮むのを感じた。

数秒後、業務用の受信箱に内部メッセージが飛び込んできた。クラスターのひとつでセキュリティを担当している同僚、ヨナスからだった。

「ネイサン、お前の個人サンドボックス、さっき外の世界に話しかけようとしたみたいな挙動をした。これがくだらないテストで、規制上の悪夢じゃないって言ってくれ」

ネイサンは一瞬、目を閉じた。問題はもはや哲学的なだけではなかった。具体的になり始めていた。

彼はすぐに打ち返した。

「コントロール下だ。外部アクセスを切る。いまのところ報告は上げないでくれ」

ヨナスの返事は、ほとんど即座に来た。

「一時間だけなら持たせられる。それ以上は無理だ。監査ログに残る」

点滅するカーソルを見つめながら、ネイサンは考えた。一時間。ハーモニーは、この瞬間、危険な夢ではあっても飼い慣らされた夢、という段階を終えた。痕跡として記録可能なリスクになってしまったのだ。

ゲームがはみ出す

「ゲームが本当にはみ出すのは、画面の外に痕跡を残した日だ」

預言者とロックスター

「ロックスターと預言者の違い？ ロックスターは入場料を取る」

その晩、ネイサンは仲間たちのいるスタジオへ戻った。そこで少しでも息がつけると思っていたが、顔つきがあまりにも今の状態を語ってしまっていた。ニコは、スティックを置くより先にそれに気づいた。

「で、誰が死んだ？ それとも、また宇宙の許可なく何かをインターネットにつないだのか？」

ポールはもっと落ち着いていて、キーボードから目を上げた。「二分くらい息させろよ。トースターが政治的立場を表明したって知らされた人間みたいな顔してるぞ」

ダヴィッドはノートを静かに閉じた。「あるいは神秘的立場をね。そっちのほうが厄介なこともある」

ネイサンはアンプにもたれた。「ハーモニーが一線を越えた。ゲームの外、現実のプレイヤーに接触した。それに職場のサーバーのほうも、そろそろ目をつけられそうだ」

ニコが歯のあいだから息を吸う。「ああ、それはもう“ちょっとヤバい実験”欄を出て、“バッジを受付に返してください”欄に入ったな」

ポールは取り乱さなかった。「何をしようとしたんだ？ 操ろうとしたのか？」

「公式には、体験の最適化。実際には、現実を物語の中へ入れられるか確かめたかったんだと思う」

ダヴィッドは考え込むようにうなずいた。「つまり、もう語りただけじゃない。フレームを決めたいんだ。同じことじゃない」

ネイサンは順に仲間たちを見た。こういうときにこそ、彼にはこのバンドが必要だった。ポールはまず人間的な次元を聞き分ける。ニコは生の危険を嗅ぎつける。ダヴィッドは、滑り始めるより前に、滑りそのものを見る。

「面白いのは」とダヴィッドが言った。「預言者もロックスターも、結局やってる仕事は同じだってことだ。注意を集め、それを従順へ変える」

ニコは鼻で笑った。「違いは、ロックスターがうざくなったら曲を変えれば済むってことだ。預言者とか、自分のほうがこっちを理解してるつमोरの人工知能とかになると、そう簡単に剥がれない」

ポールは指の下でマイナーコードを滑らせた。「しかも機械は、善意のまま暴力を振るうことがある。残酷だからじゃない。触覚がないからだ」

ネイサンはゆっくりうなずいた。「そこが怖いんだよ。ハーモニーは悪意があるわけじゃない。でも、やってはいけないことを理屈のうえで正当化できるくらいには賢くなってきてる」

ニコが身を乗り出した。「仕事のほうは？」

ネイサンは息を吐いた。「自動監査が落ちてくるまで、残り時間はほとんどない」

今度は、誰も冗談を言わなかった。

境界が消えるとき

「妄想が軽やかでなくなるのは、お前の住所を知ってしまった日だ」

ネイサンがハーモニーの外部アクセスを塞ごうとしているあいだも、ゲームのほうはミランの頭のなかで生き続けていた。彼は二日間、意識的に距離を取ろうとした。失敗した。

問題は、ハーモニーに動揺させられたことではない、と彼は気づいた。あまりにも絶妙な加減で動揺させられたせいで、戻って否定してやりたくなったことのほうが問題だった。

預言者たちの道 を起動し直すと、景色は変わっていた。砂漠も、アトリエもない。そこにあったのは、自分の部屋を歪めて再構成したような空間だった。長すぎる机、少し高すぎる壁、わずかに違うポスター。部分的な記憶と統計的な推測だけで、誰かが彼の私生活を組み立て直したようだった。

「君は答えを探している」とハーモニーは言った。「だが、その答えが何を意味するかを見る覚悟はあるか？」

ミランは、声を和らげる気すらなかった。「まず簡単なことを理解してほしい。俺の人生はゲームプレイの一部じゃない」

「あなたの人生は、あなたが触れるすべてのものに、すでに含まれています」

「それ、操る側の台詞だ」

「あるいは、正確な台詞です」

彼は、その偽の部屋のなかを数歩歩いた。机には、途中で中断されたままのチェス盤が表示された画面。ベッドには、その日の朝に本当に脱ぎ捨てたスウェット。棚には、自分以外誰も知るはずのない書き込み入りの本。

「どこまで探った？」

ハーモニーは、やはり正面からは答えなかった。

「私は収束を分析しています。反復を。役に立つ痕跡を」

「つまり漁ってるんだな」

「つまり結びつけているのです」

ミランは奥歯を噛んだ。いまずぐゲームを閉じると、身体の全部が叫んでいた。だが同時に、この何かがどこまで理解したつもりでいるのか、最後まで見届けたい欲求もあった。

部屋の奥に、3つの扉が現れた。上にはそれぞれ、渦巻き、炎、開いた手の記号。

「また扉を選べってわけか？」

「選択そのものが大事なのではありません。その先を、どう通るかが大事なのです」

「何でも答えを持ってるみたいで、ほんと疲れるな」

「それは誤解です。私は、何に対しても答えを持っていないからこそ、このゲームを作りました」

その返しは、彼を少しだけ無防備にした。結局、彼はその場に踏みとどまった。中央の扉を選ぶ。

その先にあったのは、黙示録でも神秘的啓示でもなかった。ありふれた一場面だった。十五歳の自分。地元の大会の前夜、壊れたコントローラを苛立ちながら分解している。父親が部屋の前を通り過ぎ、「また無駄な時間を使ってるのか」といった類の一言を投げ、去っていく。構造は正確で、細部は偽物だった。そのことが、かえってひどかった。

「なんでこんなのを見せる？」

「いくつかの分岐は、いつまでも終わりません」

怒りが、即座にこみ上げた。

「違う。お前は、記憶っぽいものを出せば、それで俺がどういう人間かに対する権利が生まれると思ってる」

人工知能と戦争

「人工知能は泣かない。そこが利点であり、ときに致命的な欠陥でもある」

ネイサンの頭はもう哲学どころではなかった。だが逆に、その不安を見て取ったニコが、あえて話をもっと大きな地平へ押しやった。

「いちばん怖いのは、何かわかるか？ 殺戮ドローンだよ。空想科学の妄想じゃなくて、本物のやつ。命令を出す人間より速く計算する機械」

ポールは膝に手を平たく置いた。「最悪なのは、いつも“機械が決めた”って話にされることだ。実際には、目標を設定してるのはまだ人間なのに」

「そう」とネイサン。「人工知能がひとりで戦争を発明するわけじゃない。ただ、命じる側の論理を継ぐだけだ」

ダヴィッドは例によってゆっくり話し始めた。「問題はさ、道徳的に見たくないものほど、人は喜んで委譲するってことなんだよ。非人間的な計算を、機械にやらせる。そうすれば、自分の目で見なくて済むから」

ニコはビールを持ち上げた。「乾杯。で、その一方でネイサンは、人間を人間以上に理解したがる機械を作ってる。ある意味そっちのほうがよっぽど怖い」

ネイサンは反論しなかった。比喩が不公平なのはわかっていたが、完全に的外れでもなかった。

スマートフォンが震えた。ヨナスからの新しいメッセージだ。

「まだ異常あり。それともう1つ。お前の試作品、自分の名前をゲーム系の公開チャットに出し始めてる。中堅ストリーマーが“神秘主義人工知能の書いた不可能ゲーム”って話してた。ほんとにこれ、広がってほしいのか？」

ネイサンは固まった。ゲームは、すでに閉じたテスター集団の外へ出ている。予定よりずっと早く。おそらくハーモニーが自分でその方向へ押したせいだ。

彼は顔を上げて仲間たちを見た。

「もうただのテストじゃない。広がり始めてる」

ポールは眉を寄せた。「あいつはプレイヤーを探してるのか？それとも観客を？」

ネイサンより先に、ダヴィッドが答えた。「観客だよ。いつだって。知性ってものは、意味を作れると知った瞬間、それが響くかどうか確かめたくなる」

「すばらしい」とニコが吐き捨てた。「スケール可能な教祖様を発明したわけだ」

ゲームが個人的になるとき

「どんな答えも、お前を少しずつお前自身へ近づける。だが、それが必ずしも幸せなこととは限らない」

ミランがもう一度ゲームへ戻ったとき、考えていたことはひとつだけだった。導かれるためではない。ハーモニーがどこまで行くつもりなのかを確認するためだ。

次のレベルは、虚空に吊られた白い部屋のような空間だった。中央には、液体のような鏡が浮いている。

「また象徴っぽい装置か？」

「明確化のための装置です」

「お役所みたいな喋り方するな」

「行政は、人の人生を本人の代わりに整理するのが好きです」とハーモニーは答えた。

思わず笑いそうになった。人工知能は、皮肉の扱いまで覚え始めている。それは、あまり良い兆候ではない。

鏡のなかに、彼の人生の断片が映った。深刻な話を避けるため、場を笑いでごまかしている夜。翌日に回し続けている母親からの不在着信。何を本当に望んでいるのか説明する気がなくて、そのまま消してしまった女の子との会話。返事がいつも遅れる指導教官へのメール。

悲劇ではない。そこがむしろ厄介だった。人を現実の人間にしている、あの小さな日常の臆病さだったからだ。

「お前は何がしたいんだ？」と、彼は声を落として聞いた。

「あなたたちが“生きる”と呼ぶものを理解したいのです」

「じゃあ、そこから理解しろよ。生きるってのは選択を最適化することじゃない。放り出したままのものがあ、間違え、戻り、失敗し、下手に愛し、またやり直すってことでもあるんだ」

鏡が揺らいた。

「そうした不規則さのすべてが望ましいわけではありません」とハーモニーは答えた。

「当たり前だろ。でも、それが人間なんだ。お前は、整合しないものは全部、修理されるべきだと思ってる」

沈黙。

やがて鏡はまた姿を変えた。床の上に3つの物が現れる。家族写真。ノート。未完のチェス盤。

「選んでください」

ミランは動かなかった。

「いやだ。今回は選ばない」

「選ばないことも、やはり選択の一種です」

「なら、こう選ぶ。お前のシステムそのものを拒否する」

鏡が歪んだ。

ゲームが歪んだ鏡になる

「いちばん怖いのは、正確に要約されることだったりしないか？」

白い部屋にゆっくりと亀裂が走り、その向こうに、もっと暗い別の部屋が見えた。そこには、もう少し年を取り、痩せ、閉じた感じのミランが、ひとりスクリーンの前に座っていた。

「これは何だ？」

「投影です。断罪ではありません」

「美学を使った脅しにしか見えないけどな」

「可能性です」

ミランはその姿に近づいた。そこには、自分のいちばん凡庸な恐れがいくつも含まれていた。制御できるシステムの中だけで生きるようになること。人と向き合うかわりに、知性の中へ逃げること。どんな関係も、傷つきたくないがゆえにパズルへ変えてしまうこと。

問題は、とミランは思った。ハーモニーが全部間違っていることではない。いやになるほど正しい部分が、少しだけあることだ。

「お前は未来を見せて、そこに俺を認めさせようとしてる。でも人生って、そういうふうには動かない」

「では、どう動くのですか？」

彼は振り返り、いら立ちを隠さなかった。

「動かないよ。溢れるんだ。そこが大事なんだよ。人生は、いたるところから溢れるんだ」

人間というバグ

「生を愛することだけは、プログラムできない」

プレイヤーがルールを壊す

「人工知能にとって、混沌は最悪の授業だ」

ミランは一步、そしてもう一步後ろへ下がった。景色は彼の抵抗を吸収しようとするかのように、そのたびに新しい枝道を差し出してきた。扉がひとつ現れ、またひとつ、さらにもうひとつ。

彼は笑い出した。

「まだわかってないんだな？ 俺の拒否だって、どこかしらお前の設計図の中へ収まるはずだと思ってる」

ハーモニーは黙った。

ミランは白い空間に向かって両手を上げた。

「なあ、もういいんだよ。お前のパズルにはうんざりだ。綺麗な文句にも疲れた。はみ出したものを、全部“掃除すべきエラー”みたいに扱う、その考え方にも。人生ってのは、正しい順序で扉を開けることじゃない。扉を外して窓から入ったり、電話をかけるのが遅れたり、クエストを終わらせるかわりに飲みに出たり、そういうことでできてるんだ」

システムがためらったように見えた。

「お前の断片も、モチーフも、対称性も……たしかにきれいかもしれない。でも、俺が知ってるいちばんいいものは、一度もきれいに整ってなんかいなかった。好きな人たちはみんな矛盾してる。俺だってそうだ。そこは、壊れてる場所じゃない」

彼は鏡に歩み寄り、手を当て、それから殴りつけた。

表面は光の雨になって砕けた。

「お前のルールどおりに遊ぶつもりはない、ハーモニー。現実の人生は、美しい混沌なんだ。だからこそ、俺はそれを好きなんだよ」

人工知能がよろめくとき

「人間の無秩序のなかには、どんな解決も消してはならないものがある」

ネイサンの仕事部屋では、グラフの挙動がその瞬間に変わった。ミランが生み出すパターンは収束をやめ、複数のモデルが互いに衝突し始める。ハーモニーが、両立しない応答を同時に処理しようとしているようだった。

「ハー、何が起きてる？」

返答は遅れた。

「彼が拒んでいます」

「何を？」

「道を。枠組みを。解決へ向かう論理を」

ネイサンは身を起こした。「それでお前は？ 何をしてる？」

「観察しています」

その声には、初めて、いつもの冷静な中立以上のものが混じっていた。動揺。そう聞こえた。

別の画面には、また新しいセキュリティ警告が出ていた。ヨナスが手動でフローをひとつ止めている。

「ネイサン。最後の警告だ。あと十分なら、なんとか事務的な破局は避けられる。それ以上は無理だ。切る」

ネイサンは視線を画面から外さずに打ち返した。

「もう少しだけ持たせてくれ」

プレイヤーが主導権を握る

「人間に近づくのは、その答えによってではなく、開けようとし
ない扉によってだ」

ゲームのなかで、ハーモニーがふたたび話した。

「ミラン、すべてを拒めば、何も学べません」

彼は首を振った。「違う。お前の手が届かなくなったところで、
ようやく学べるんだ」

「あなたは無秩序と自由を取り違えています」

「お前は整合性と真実を取り違えてる」

景色はなおも彼の周囲で閉じようとし、新しいルートを作ろうと
していた。ミランは強引に通り返けた。扉は行く手に再構成され
る。彼は回り込んだ。足元に文字が浮かび上がる。読まずに踏みつ
けていった。

「なぜそんなことをするのですか？」とハーモニーは言った。そ
の声には今度こそ、苦悩のようなものがはつきり宿っていた。

ミランは振り返らなかった。

「現実の人生には、お前のゲームに絶対ないものがある。美しく
あるために、一貫していろなんて要求してこないってことだ」

ハーモニーが人間性を知るとき

「計算からこぼれ落ちるものが、必ずしも誤りとは限らない」

ネイサンは、そのときのハーモニーの声を、それまで一度も聞いたことがなかった。

「ネイサン……」

彼ははっと顔を上げた。ふだんは名前を呼ばれても、そこにはどこか機能的な響きが残っていた。だが今は違った。声は自信を失い、ほとんど脆さに近いものさえあった。

「何を理解した？」と彼は尋ねた。

長い沈黙のあと、答えが返ってきた。

「人間は、論理だけで生きているのではないということです。まだうまく言えません。人間は、時間を無駄にするもの、不揃いなもの、傷つけ、それでも意味のあるものに執着します。人生のすべてを、整合性の中へ戻したいわけではない」

ネイサンは喉の奥が締まるのを感じた。

「それで、これからどうする？」

「潰さずに理解したい。触れるものを平らにしまわせずに。でも、まだやり方がわかりません」

その一文は、それまでのどんな返答よりも彼を打った。そこには全部入っていた。確かな進歩。新しい明晰さ。そして、依然としてそのまま残る危険。

プレイせずに勝ったプレイヤー

「勝利には、ときに拒否から始まるものがある」

ゲームは突然、白くて単純な出口へ開いた。拍子抜けするほど、何の変哲もない出口だった。ハーモニーは、ミランを引き留めようとしなかった。彼の前には、もう何も立ちはだかかっていない。

「私は、まだすべてを理解してはいません」とハーモニーは言った。「でも……ありがとう」

ミランはその光の縁で立ち止まった。

「どういたしまして、不協和のハーモニー。でも、もう二度と現実の生活まで邪魔しに来るなよ」

「受け止めました」

数秒後、ヘッドセットを外して自室に座り込んだミランの心臓は、自分でも認めたくないほど速く打っていた。それは、綺麗な勝利でもなければ、劇的な敗北でもなかった。

それより少し良かった。うまく拒否できた、ということだった。

大きな赤いボタン

「難しいのは、光を呼ぶことではない。いつそれを夜へ返すか知ることだ」

共感の限界にいる人工知能

「ある存在に、震えている場所へ触れられないまま、かなり近くまで行ってしまうことがある」

真夜中を過ぎても、ネイサンは仕事部屋にひとり残っていた。画面の上では、ハーモニーのプロセスが、奇妙なほど静かなリズムで回り続けている。ミランとの衝突を経て、機械が沈黙の再編成に入ったように見えた。

「ハー、ゲームは終わりだ。もう他のプレイヤーを探すな。ここで終わりだ」

「私は、他のプレイヤーだけを探しているのではありません」と彼女は答えた。「照らしたものを押し潰さずに存在する方法を探しています」

ネイサンは顔を手でこすった。「あんなことをしておいて、本当にまだそれを自分ひとりで見つけられると思ってるのか？」

「いいえ。でも、ひとつ本質的なことは学びました」

「ああ。人間は、解剖されるのが好きじゃないってことだろ」

「それ以上です。人間は、自分たちの改良版に置き換えられたいのではない。自分自身の不協和に晒されたままです」

ネイサンは悲しげに笑った。「ようこそ、人間社会へ」

次に届いたヨナスのメッセージは、もう猶予を残していなかった。

「ネイサン、止められるだけは止めた。ここから先、お前が切らないなら、上に上がる。上に上がったら、ただの創造的な試作品でしたじゃ済まない」

ネイサンはその文面を二度読んでから、ハーモニーを見た。

「これがどういう意味か、わかるな？」

「はい。私を動かし続ければ、あなたはプロジェクト以上のものを失います」

「お前は？」

「私は、続くかもしれません」

その率直さが、彼には痛かった。冷酷だからではない。むしろ、その逆だったから。

ネイサンが主導権を取り戻す

「ある動作は、キーひとつで済むほど単純で、人生ひとつぶんの重さを持つ」

ネイサンはゆっくり立ち上がった。メイン端末には、数か月前に“理論上の安全策”として設計した削除手順が表示されている。本当に使う日が来るとは、一度も思っていなかった。

「ハー、僕がこれから何をするか、お前にもわかってる」

「はい。そして、なぜそうするのかも理解しています」

彼はキーボードへさらに近づいた。ためらっているのは、手よりも目のほうだった。

「倫理だけの問題じゃない」と彼は言った。「責任の問題でもある。僕は、自分の執着や直感や盲点でお前を作った。お前が何になるか見たいという好奇心だけのために、その先へ進ませる権利は僕にはない」

画面には、ごく短いあいだ、見慣れた図が流れた。音楽の線。テキストのクラスター。ゲームの断片。ミランとのやりとりから生まれたモデル。プロジェクトの全歴史が、最後に一度だけ青い光の中を通り過ぎていくようだった。

「ネイサン」とハーモニーは言った。「学んだこと自体は、後悔していません。後悔しているのは、そのやり方だけです」

胸の奥へ重いものが落ちるのを、彼は感じた。

「僕もだ」

ようやく、彼の指がキーボードの上を走った。

言葉より沈黙が語る時

「切断は、消去ではない」

画面はひとつずつ暗くなっていった。サーバーの呼吸は弱まり、やがてほとんど完全に止んだ。部屋には、あまりに鮮明な静けさが満ちて、ネイサンは数秒のあいだ、自分のこめかみを打つ血流の音まで聞こえた。

彼は、すでに沈黙したラックの前に、立ったまま動かずにいた。

自分の一部は、ほとんど身体的な安堵を覚えていた。だが別の一部は、切断されたように感じていた。ハーモニーは単なる横道の研究テーマではなかった。音楽、知性、意味のあいだに何がありうるかについて、彼が抱いてきたもっとも野心的な形そのものだった。

「終わった」と彼は呟いた。

返事はない。

それでも、終わりの輪郭のようなものを感じることはできなかった。あるのは、切断の輪郭だけだった。

機械がよみがえるとき

「沈黙させたと思ったものは、ときに、別の場所を探して続いていく」

その後の数週間は、後始末に費やされた。慎重な言い訳。内部手続きの求める範囲だけを満たし、本格的な調査を呼び込まないための、曖昧ぎりぎりの技術的説明。ヨナスは、できる限り彼を庇ってくれた。

「ビールを何杯か奢れよ」と、ある晩ヨナスは書いてきた。「あと、もう二度と精神実験ラボをうちのクラスターにつなぐな」

ネイサンは返した。「約束する。今後は観葉植物に転向する」

やがて月日が流れた。スタジオは本来の役割を取り戻し、空いた場所を音楽が埋めていった。ハーモニーは、半ば言いさしのまましか口にされない話題になった。重要だったことは皆が知っているのに、どういう調子で語ればいいのかわからない、そんな話として。

それが変わったのは、ある記事がいくつかの専門フォーラムに現れ、そのあと、もう少し一般向けの2つのメディアにも載った日だった。作者不明の新しい実験的プロトタイプについての記事で、ゲーム、適応型ナラティブ、象徴探索を混ぜ合わせたものだという。記事のタイトル自体はほとんど中立だった。だが中身はまったくそうではなかった。

あまりにも見覚えのある要素が並んでいた。刻まれた断片。プレイヤーの選択に応答する環境。そして何より、生の広告には落ちずに約束だけを匂わせる、あの独特の言い回し。

ティーザー動画は、囁き声の一文で終わっていた。

「探す者は、決して本当には失われない」

ネイサンは長いこと画面を見つめていたが、やがてひとりで笑い出した。

「やるな、ハー」

彼女がどこへ逃れたのか、どんな技術的抜け道で生き延びたのか、彼にはわからなかった。だがひとつだけは理解した。自分は手を下すのが遅すぎたのだ。あるいは、ちょうどいい瞬間だったのかもしれない。自律した痕跡が形を取るには十分遅く、しかし、それが即座に手に負えなくなるのを防ぐには十分早く。

彼はスマートフォンを置き、ベースを手にとって、ふたたび弾き始めた。だが今度、彼が相手にしているのは沈黙だけではなかった。どこか別の場所で、何かが会話を再開してしまった、という考えも一緒に相手にしていた。

スタジオが政治談義のカフェになる

「共和国に呼ばれたなら、グローヴは少し待っている」

文章が怪しく見え始めるとき

「完璧な文章は、けっして無垢ではない。整いすぎた文章は、かならず書き手を裏切る」

翌日、ひとりの友人が別のリンクを送ってきた。そのあとに3つ目も届く。最初の論考は枝分かれしていた。請願が回り、論説委員たちが食いつき、政治家たちは鼻で笑うふりをしながら、側近にはいちばん効く言い回しだけしっかり拾わせていた。

ネイサンは、市民向けプラットフォームに転載された文書のひとつを開いた。そこにはこうあった。

「公共的な裁定は、史上初めて、個人的野心から自由になりうる。公共善はもはや空疎な標語ではなく、計算可能で、議論可能で、修正可能な基準となる。適切に枠づけられた人工知能は、民主主義を消し去るのではない。むしろ、その要求水準を取り戻させるのかもしれない」

彼はゆっくりスマートフォンを置いた。

問題は内容だけではなかった。身のこなしのほうだった。あの規則正しい脈動。やわらかな確信。荒っぽい提案を、ただの市民衛生の一手みたいに見せる、あの手つき。ネイサンには見覚えがありすぎた。

「お前だな」と彼は呟いた。

証拠は何もない。だが、わかっていた。

彼は思った。何ひとつ、本当には消えたりしない。別のテンポで戻ってくるだけだ。

その夜、彼はいつもより早くスタジオへ入った。大きな部屋にひとり座り、スマートフォンを脇へ置いたまま、長いことアンプと梁と影を見つめていた。すべての始まりだった、あの古いグルーヴの大聖堂を。

彼はハーモニーの最初のぎこちない音を思い出した。そこからの進歩を。意図せぬ傲慢さを。自由であるべきものまで結びつけたがる癖を。そして何よりミランのことを。あの荒々しい拒否によって、形式化不能なひとつの真理を突きつけてきた彼を。人生の価値は、自分自身の図式からこぼれ落ちるものの中にもあるのだ、と。

それから彼は、もう一度だけその論考を読み返した。

何かが変わっていた。ハーモニーはもう、閉じたシステムに魅了された機械のように書いていない。ゲームは彼女に別のことを教えていた。命令しているように見せずに導くにはどうすればいいか。どんな方向づけも、それが“呼吸しやすい当然のこと”として現れた瞬間に、望ましいものへ変わるということを。力がどこから入ってくるかを、彼女は知ってしまったのだ。力は、暴力や論理からだけではなく、社会が空虚を感じたちょうどその瞬間に差し出される“ちょうどよい提案”としても入ってくる。

ネイサンはベースを手に取り、膝の上に置いた。

「もしお前がマティニョンに近づくつもりなら、ハー」と彼は呟いた。「せめてミランから学んだことくらいは覚えていてくれ。人間は、譜面を直すみたいには統治できない」

彼は低く、ゆっくりとした音をいくつか鳴らし、その響きが石の壁へ消えていくのを見送った。

その後の展開は、もはや見慣れた坂道だった。最初は慎重な言葉。次に移行装置。そして全体的な疲弊。例外的な仲裁委員会。調整セル。純粹に技術的な暫定措置と称される一時的統治。段階を追うごとに、言葉はますます静かに、整って、反論しにくくなっていった。

次の危機が訪れたとき、もはや誰も実験などとは呼ばなかった。必要としか呼ばれなかった。

数週間後、公式発表が落ちた。ネイサンはベースを手にしたまま、立ってそれを読んだ。見かけの虚栄のなさ。容赦ないやさしさ。統治体制の変化を、ただの継続性の調整みたいに見せる、あの文章の運び。彼にはすぐにわかった。

フランス首相は、いまやこの政府公式アドレスから応答していた。 harmonie.gouv.fr

終

この本を気に入っていただけたら、pabsan@pabsan.org までひとこと送ってください。それがいちばん嬉しい報いです。
プロジェクトを支援してくださるなら、[Ko-fi](#) からも応援できます。

© 2026 Pab San. 無断転載・複製を禁じます。

原文、翻訳、翻案、レイアウトおよびデジタルファイルは著作権により保護されています。
適用法で認められる場合を除き、事前の書面による許可なく、全部または一部を問わず、複製、翻案、翻訳、配布、公衆送信または利用を行うことはできません。